地域資料叢書 21

土佐中東部の荘園故地を歩く

一第1分冊:大忍庄・韮生郷・山田郷調査研究報告書―



奥四万十山の暮らし調査団編

巻頭言

吉川弘文館から講座日本荘園史が刊行されており、秋澤繁氏が悲田院(極楽寺)領土佐国大忍庄を執筆されている。この講座準備段階での編集会議にわたしも補佐員として陪席した。四国で取り上げるべき庄園を検討していて、網野善彦氏が土佐は大忍庄を特論の対象とすると発言された。「当然」、当たり前ということで説明はなかったけれど、『元亨釈書』にみえる記事を意識されていたと思う。忍性が、鎌倉の桑が谷療養所に療病院・悲田院を構え、この二十年の間に治療して病が癒えたものが四万六千八百人、死者が一万四百五十人、生きながらえたものが五分の四を超えている。その維持のために北条時宗の発案で土佐国の大忍庄からの年貢をこの費用に当てる、と記されている。療病院・悲田院はハンセン病患者、歴史的用語では「癩者」であるが、その療養所であった。当時「癩」は不治の病であった。回復者が多かったのなら、両院ではほかにもさまざまな病者を受け入れていたのであろう。一年あたり二千五百人を収容したようで、その莫大な経費を物部川流域に暮らす人たちが負担していた。

わたしは物部川上流域、大忍庄故地の槇山と隣接する韮生を訪れたとき、療病院・悲田院との関係を示す何らかの痕跡が残っていないものか、と考えた。領家が悲田院なら、庄家近くに土佐国悲田院をおいたのではないか、とも考えた。しかしそれらしいものを見つけることはできなかった。だが山村に生きてきた人たちの豊かな過去に思いを寄せることはできた。この地域が物部川という水運を得て木材を切り、運び出す。北条得宗領として掌握された富の源泉も推測できる。療病院・悲田院領に設定される経緯である。長宗我部地検帳の世界が聞き取りによって間近に蘇ることにも驚いたが、同時に豊かさを誇ったその地域に過疎という厳しい現実が迫っていることも注視せざるを得なかった。村々はやがて千年の歴史を失うかも知れなかった。その後調査を担当したわたしのゼミ生の楠瀬慶太さんの緊急調査成果は『地域資料叢書9新韮生槇山風土記』花書院(2008)として刊行されている。

今回大忍庄・韮生郷・山田郷などの調査成果として続巻が刊行される。調査成果が次第次第 に蓄積されていき、地域の歴史に取り組まれる方々が広がり、視点も拡大された。このことに 大きな喜びをかみしめている。

> くまもと文学・歴史館館長 服部 英雄

目次(第1分冊)

巻頭言(服部英雄)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
序言 (楠瀬慶太)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
第1部 大忍庄・韮生郷・山田郷故地調査報告
山北前田(楠瀬慶太)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
行宗 (楠瀬慶太)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
福万 (楠瀬慶太)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
柳瀬 (楠瀬慶太)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
コラム 荘園故地を歩いて (鹿山雅貴)・・・・・・・・・・・・・・・・21
コラム〈消えゆく〉歴史の現場に考える―歴史の〈消滅〉をめぐる哲学的考察(三升寛人)・・・28
西後入(楠瀬慶太、大和敦子、石川惠大、大内田将爽)・・・・・・・・・・・・・28
談議所の民俗誌-香美市・山田堰周辺の暮らしの記憶 (清水謙次郎)・・・・・・・・34
第2部 大忍庄を読み解く
物部見聞記~人・暮らし・文化を記録する~(矢野恵)・・・・・・・・・・・・50
大忍庄域に分布する中世期石仏を中心とする石造物の様相(濱田眞尚)・・・・・・・・68
大忍庄山南東分「十万」に拠在する城跡についての覚書(宮地啓介)・・・・・・・・82
「行宗文書」原本調査報告―近世・近代の痕跡―(荒田雄市)・・・・・・・・・・・110
香南市の消えた地名の復原―条里制の坪・岸本の丸・徳王子の源氏物語巻名地名― (武内文治)・・138
執筆者紹介・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 142

序言

2007年夏、大学院の修士課程1年生だった筆者は、国立歴史民俗博物館の共同研究「中近世における生業と技術・呪術信仰」(井原今朝男代表)の調査の一環で、指導教官の服部英雄先生と香美市物部町の山間集落に入った。当地は中世に極楽寺などが支配した大忍庄の槇山分と言われる山間荘園の故地であった。「小松文書」等に登場する中世の地名が古老から次々と語られること、一方で多くの集落が過疎高齢化で消滅の危機に瀕していることに衝撃を受け、以後1カ月で旧物部町のほぼ全集落を調査で回ることになった。その後、調査成果は拙著2008『新韮生槇山風土記』(地域資料叢書9、花書院)としてまとめられる。秋澤繁氏を始め多くの研究者が足を運んだ物部だが、現地調査の成果は活字化されておらず、拙著が大忍庄を対象とした最初の現地調査報告書となった¹⁾。しかし、大忍庄は徳島県境の山地から平野部を経て太平洋に面した外港・岸本に至る巨大荘園であり、報告書はその一部を調査・報告したにすぎなかった。

それから 12 年余りが経過した 2019 年春、大忍庄の在地文書である「行宗文書」と隣接地の柳瀬名(香美市物部町)の古文書「柳瀬文書」の現本調査および現地調査に、中世地下文書研究会³⁾の春田直紀代表らが訪れ、筆者が研究報告および現地の案内役をさせていただいた。行宗文書は大忍庄でも平野部に近い山裾部(西川分)にある行宗名(香南市香我美町)の名主が作成した文書群であるが、文書を使った現地調査はほとんど行われていなかった。研究報告に際して現地での聞き取りを行うと新たな知見を多く得ることができた。その中で、改めて近年停滞している荘園の現地調査と研究の必要性を痛感し、本書の編集を企画したところである。

土佐中東部(長岡郡・香美郡)の南国市には土佐国府、守護館が置かれるなど、近世初期に高知市中心部に城下町ができるまで土佐国の中心であった。中世には、香美郡に夜須庄(石清水八幡宮領)・大忍庄(得宗家領→極楽寺領→熊野新宮領)・吉原庄・物部庄・田村庄(石清水八幡宮領等)、長岡郡に片山庄(相国寺勝定院領等)・介良庄(伊豆走湯山密厳院領等)・吾橋庄(熊野領)があり、隣接する土佐郡には一宮庄・久満庄(神護寺領)・潮江庄・神田庄・鴨部庄(石清水八幡宮領)・朝倉庄(法金剛院領)があり、多くの荘園が所在した地域であった²)。

本書は、高知県西部の幡多庄や津野庄の荘園故地の現地調査をしてきた四万十町の住民団体「奥四万十山の暮らし調査団」⁴⁾(武内文治代表)が、「調査研究を荘園の密集地域である県中

東部へ広げるきっかけにしたい」と編集した調査研究報告書である。土佐中東部の歴史を調査研究する県内外の研究者や住民に声がけし、研究領域を超えて幅広い視野で地域の歴史を読み解いている。本書の各論考は、古文書に登場する地域(現地・故地)を実際に歩き、空間的・地理的な視点を持ちながら、実証的



本書が対象とする主な荘園・郷と集落

に歴史事象を検証していくという方法論で執筆されている。そのため、論考に登場する地域や 地名の地図、写真をできるだけ掲載している。

第1分冊は「大忍庄・韮生郷・山田郷調査研究報告書」、第2分冊は「介良庄・片山庄・朝倉 庄調査研究報告書」と副題を付け、地域を分けて計24本の論考・コラム等を収録した。

第1部(以下第1分冊)は「大忍庄・韮生郷・山田郷故地調査報告」で、大忍庄西川分の山 北前田・行宗・福万、韮山郷の柳瀬、山田郷の西後入・談議所について、地名や民俗誌を中心 とした現地での聞き取り調査の成果を報告した。戦国末期の『長宗我部地検帳』など文書記載 地名の現地比定や村落の景観復元にも挑戦している。

第2部は「大忍庄を読み解く」と題し、歴史・民俗・美術史・考古の論考5本を掲載した。「物部見聞記」は香美市の元地域おこし協力隊員が聞き取った民俗誌の報告、「大忍庄域に分布する中世期石仏を中心とする石造物の様相」は未解明だった大忍庄内の石仏を悉皆調査し、分類して考察を深めた論考、「大忍庄山南東分「十万」に拠在する城跡についての覚書」は考古学の知見から十万城跡周辺の城跡や遺跡を総合的に分析した論考、「「行宗文書」原本調査報告」は文書論の観点から「行宗文書」の伝来過程を考察した論考、「香南市の消えた地名の復原」は消滅した大忍庄域の歴史地名の復元を目指した論考である。

第3部は「地域資源地図の世界」(以下第2分冊)。集落の歴史に関わる伝承や聞き取りの記録を地図の形で可視化し、周知・継承していく歴史実践の方法(ツール)を紹介している。

第4部は「中東部荘園故地の諸相」と題し、土佐中部・中東部・東部(安芸郡)を対象とした論考を収録した。「中世・吸江庵領の歴史的景観」は介良庄・片山庄・吾川山庄の現地調査の報告、「源希義誅殺の地と介良庄」ほか3本は土佐で挙兵した源頼朝の弟・希義の死亡地についての定説を、近世の文献を分析することで覆そうと試みた意欲作、「鷹場にまつわる罪と罰」は17世紀の鷹場について実証的に考察した論考、「朝倉庄故地を歩く」ほか2本は高知大生と行った朝倉庄故地の現地調査の報告、「土佐東部の荘園と港湾形成」は長年の現地踏査の知見から土佐東部の港湾の景観変遷モデルを示した論考である。

本書では、幅広い年代と分野の研究者たちの協力で、「土佐中東部の荘園故地」をフィールドに多くの調査記録と研究成果を蓄積することができたと考えている。しかし、調査できた地域や研究の机上にのぼった史料は一部であり、今後も調査研究を進めていく必要性があろう。本県では2021年度から新しい『高知県史』の編纂もスタートする。本書が基礎資料となり、土佐の荘園研究や土佐中東部の歴史研究が進展することを期待したい。

(楠瀬慶太)

【註】

- 1) 『新韮生槇山風土記』の成果を元に、楠瀬慶太 2009「限界集落化の歴史的プロセスに見る山村の未来」『政策・経営研究』2009vol.1、同 2013「高知県の地名に見る災害と開発の記憶」『土佐民俗』96 号、同 2013「高知県旧物部村の地名に見る山の生活誌」『四国中世史研究』12 号、同 2018「土佐山村の屋号研究試論」『高知大國文』49 号などで未報告だった調査成果を発表しているが、紹介できたものはごく一部である。
- 2) 秋澤繁 2005「土佐国」『講座日本荘園史 10 四国・九州地方の荘園』吉川弘文館
- 3) 中世地下文書研究会は「大忍荘関連史料データベース」も作成している。
- 4) 2016年の設立で、筆者は事務局長を務めている。

第1部 大忍庄·韮生鄉·山田鄉故地調查報告

山北前田-中世の景観残す屋敷地-

香南市香我美町山北 (旧山北村¹⁾) の南東部、山北川に隣接した集落が「前田」である。詳しいことは不明だが、中世には大忍庄西川分の内にあったと考えられる²⁾。山北川を天然の要害にした前田城跡の遺構や武家屋敷など中世の景観を残す。江戸期にも前田城主の系譜を持つ前田氏は当地に所在し、前田与右衛門が村内に給田を持っている(「元禄地払帳」)。本稿では、現地を歩き戦国末期の『長宗我部地検帳』(以下『地検帳』)に



前田集落の入口。城山付近

記された村落景観をたどるともに、前田集落の民俗誌を書き記す3)。

1、『地検帳』に見る前田村

天正 16 年(1588)の『地検帳』大忍庄地検帳には、旧山北村の領域に遠崎・深田・ヨノ谷(ヨ谷)・イツクミ・前田・惣方・釜谷(カマイ谷)・平等寺・有崗・生能寺・徳中・山崎・安弘・上ノ王子・安松の 15 村がみえる。

(1) 前田村の屋敷地

このうち前田村の屋敷地は「助二郎ヤシキ」(以前は「前田 土ゐヤシキ」)から、「前田城」「二ノ塀ヤシキ」「田ハタヤシ キ」「ヤカシロノ前」「ヤカシロノ西」「六良左衛門ヤシキ」「六 良左衛門ヤシキノ北」「野々内ヤシキ」「有光ヤシキ」「ヤカシ ロノ西ノ浦」「ヤカシロノ後」「ノ々内ヤシキホリアケテ」「ノ々 内ヤシキノ後」「有光ヤシキ」「東カワラウ

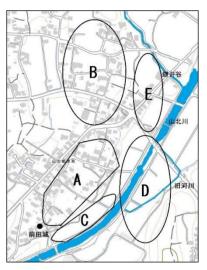


図1 戦国期の前田村模式図

ヤシキ」「イケノ」「イケノ」と 19 軒が検地されている(屋敷地 A)。すぐに畠地「池田」を挟んで「正延」「柴ヤシキ」「中ノ内ヤシキ」「中ノ内ヤシキ」「松本ヤシキ」「新ヤシキノ西」「庵ノ内」「庵ノ内ノ西」「井ノ本」「西ノクホ」「西ノクホ」「岡ノシハ」「竹ノ内ヤシキ」「的場横ヤシキ」「ヲヲチクチ」の計 16 軒が並ぶ(屋敷地 B)。現代に残る屋号や小字(図 2)から推測すると、前田城を中心とした東側の A 区画(「前田」)と北西側の B 区画(「正延」(小字は正信))に分かれて屋敷地があったようである(図 1)。

(2) 前田村の耕地

次に前田村の耕地を見てみよう。現在では、山北川の新岩渕橋のすぐ上から取水した水路「城府のドント」が引かれ、山北川沿いに田が開かれている(「川田」「城府」「弓場ノ下」へ利水)。 当時は小字「川田」が残るように基本的には川成になることの多い田だったようであるが、「ヤシキノ下ホリタ」(21代)「田ハタヤシキ南下」(1反12代4歩)「シヤフノ浦」(1反)「助二良ヤシキノ下河イエ」(48代2歩)の4筆がいずれも下田、「ショウフヤシキホリノウラ」(4反4代4歩)が中田となっている。この検地で追加された出分が多いことから、「城府のドント」のような水路が引かれ、この一帯(耕地C)耕地開発が進んでいたことが分かる。

旧河川沿いには、一部が川成や河原になった「岩淵」「ヒワノカワ(コウ)」(枇杷川)の田が

あり、その西側に「有光」の田が広がっている。山北川沿いの「岩淵」には、「カチノ井流」の表記があり、耕地Dの南側に利水する水路があったようである。現在も山北川から取水口はある。現在も山北川から取水口は変化)の名称が残る。「岩淵」は計5筆13反44代8歩で上田1筆、中田1筆、下田3筆である。「根杷川」は計4筆6反45代になり、3筆が上田、川成の1筆は下田である。「有光」は計6筆6反44代3歩で、中田3筆、下田3筆である。

また、北側から流れてきた谷 川 (鎌井谷) がある北東側 (耕地 E) に「ウリウタ」(上田2筆4反



図2 前田の地名地図

(傍線は『地検帳』記載地名、「」は屋号)

7代)、「竹ノ下」(上田1筆3反2代)、「源大良」(上田1筆9反25代)が広がる。こちらは「源大良川懸テ」の表記から水量の豊富な谷川からの利水だったようで、上田ばかりで面積も広い。 畠地は一部屋敷地や田の間にあるぐらいでほとんどない。

(3) 中世前田村の景観

『地検帳』から中世の前田村は、屋敷地と耕地が明確に区分された景観であったことが分かった(図 1)。集落はそれほど密集していないが集住形態を取っており、水害のリスクの少ない微高地の屋敷地 A には、前田城を拠点に武家屋敷が散在していた。屋敷地 B はやや散居的ではあるが集落域を形成していたと考えられる。これらの屋敷名は現在の屋号には一部しか残っていない。地名を見ると、A には「有光」、B には「正延」という百姓名の呼称が残っており、中世には2つの名であったと推測できる。また、『地検帳』では前田村の土地はほとんどが前田分だが、給人は長宗左兵衛給となっており、土地支配の形態については不明な部分が多い。

2、山北前田の民俗誌

(1) 地名

城山 屋号でもある。前田城があった。昔は西、南西に1mくらいの高さの土塁があって今も 一部残っているが、崩れている。

部落の南端にあるのでそう屋号で読んでいた。

藤 小さい時に聞いた言い伝えで、砦を守る役割で一帯が武家屋敷。藤村某の屋敷があったそうで屋号が「藤」。今の姓は近森。「ムカイ山」には藤村家の夫婦の自然石(丸石)の結構大きな墓(高さ約1.2m)があって字も書いてあった。平らな所に石垣を高くして墓があった。

東 屋号。「藤」の分家。

横・ヘヤ・出口 屋号。「横」は横屋敷とも呼ぶ。

天馬屋 屋号。昔から馬を飼育していたという言い伝えがある

野々内屋敷 屋号。系図があって、藤原某が前田城主で来た。途中で 近森と姓を変えて池田屋敷を構えたと系図に書いている。一角に八 幡さんというお宮があって、戦前までは出店が出るくらいな祭りが あって盛大だった。近森家の分家。

池田屋敷 屋号。近森家の本家。

菊店・髙橋 菊店は雑貨屋、髙橋は魚屋。

シバサキ 瓦工場があった一角の地名。四坊 (集落名) がなまりシバサキになったと聞く。

岩淵 川淵。大きな石灰岩があって水の中に穴ポコがある。

チウケ谷 小字はシウケ谷。段々畑があった。

城府のドンド 水路。昔は小字「城府」の田は、西側の土手を低くし 五輪塔

て水が越えたら流す。大雨で浸かる湧水帯だった。

ソガの池 四国ヒューム管の山北工場の西側を「ソガ」と言って、道路東側に昔池があった。 ソガには神社もあったが、中ノ村の天将さんに移管した。

(2) 集落

前田集落は、上(かみ)、中(なか)、下(しも)。その中に「シル組」と言って江戸時代の5人組の名残かと思われる組がある。鍋から吹いた汁が冷めないという意味で5、6軒。冠婚葬祭もこの組でやっていた。



屋号「藤」近くにある中世の



城府の田

(3) 宗教

神社は、神母神社と八幡(うっそうとした大きな木があった)、ゲートボール場の前には近森神社(先祖神)がある。近くには、池と祠もある。昔は温泉が出よったが、近居のおばあがおしめ洗ったら出なくなったという。湧き水があり、子供の時はフナ釣りをした。

昔は岩渕橋でエンコウ祭りをしていた。馬をつないでいたらエンコウが引っ張り、馬を引き込もうとしたが、逆に馬に引っぱられて田んぼ引きずられた。エンコウは皿が乾いて死んだという。エンコウの墓もある。

(楠瀬慶太)

【註】

- 1) 山北村は中世の大忍庄の西端にあり、香宗我部郷の境界の地であった。応安元年(1368) 11 月 7 日付の源義信裁許状(「香宗我部家伝証文」) に、山北村西端の笠原の地名がみえる。
- ²⁾ 応永 29 年 (1422) 8 月の大忍庄内検帳 (「安芸文書」) に「山北」と記され、永享 8 年 (1436) 10 月 20 日の 行宗名年貢米注進状 (「行宗文書」) には「大里庄山北東分西川行宗名」とみえる。
- 3) 2019 年 4 月 29 日に前田出身の近森啓二氏(昭和 24 年生)に聞き取り調査を行い、現地踏査を行った成果の報告である。

行宗一「行宗文書」の中世地名一

香南市香我美町中西川に位置する谷川沿いの 小集落が、香美市から香南市に広がった中世の 荘園「大忍庄」西川分に所在した行宗名の故地で ある。行宗名についてはこれまで詳細な現地調 査は行われていなかったが、聞き取り調査¹⁾を 進めると、名主・行宗氏が作成した文書群「行宗 文書」(高知県立図書館所蔵)に記された中世地 名が多く残っていた。本稿では、村の景観や開発

の様子など中世の村落社会を明らかにする手がかりに するため、地名の現地比定の結果を中心に報告する²⁾。



行宗名故地。行宗谷下に広がる田

地蔵堂。この前に行宗土居があった

トサカ谷の入口

1、地名

聞き取りで聞き取った地名を小字とともに図1に示した。新出地名は+、屋号は「」、「行宗文書」記載の地名は傍線で示した(図1)。

重利 しげとしでなく、「しげり」と呼んでいる。

イノウエ 水路の上だからか。井ノ上堰がある。竹成・ 影谷までかかりる。堰は他に鳥岩堰、滝ノ宮堰がある。 **ナノウラ** 地元ではナナウラと呼ぶ。

石ガ迫 山神がある。

床鍋・大谷 今はないが奥に田んぼがあった。キリガサ コは切畑。

淵 今はないが滝ノ宮に結構深い淵があった。

2、集落

集落 中西川が南に蛇行してからの「下組」には、「シバ」「イノウエ」「行宗」「タクミ」と小 集落があり、「木ノ内」にも1軒家がある。

行宗 行宗の集落は私が知ってからは4軒。行宗家は東北の伊達家の家臣と聞いたことがあるが定かでない。「寺山の下」にあったのが行宗の本家(「土居」(行宗城跡)) らしい。谷上にある家は「オモヤ」「ヘヤ」と呼んでいた。

3、宗教

重三郎の墓 「行宗」の上の端にもう1軒家が昔あって、その下段に墓がある。行宗の「重三郎ゆきつぐ」の墓。江戸時代の年号が記してある。

八幡 「行宗」の上には八幡さまもある。木の祠で「行宗」全戸でまつる。6 月にはそうじ、夏 (旧暦 8 月 15 日) が祭日。幟は江戸時代、「文久」の年号のものがあった。

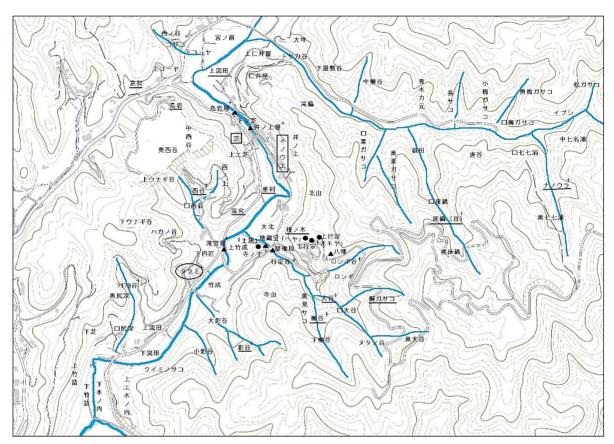


図 1 行宗の地名地図 (傍線は「行宗文書」記載地名、+は新出地名、屋号は「 」)

ジゾウド(地蔵堂) お祭りの時は下組全体2軒1組でそうじする。子供ができた時に乳が出る。乳の神様。集落外の人もお祭りにきよった。

聖神社 聖権現とも。寺山の下、お地蔵さんの前の広場の近辺がお宮のあとで国有地になっている。ツヤドウというお宮の集まりがあった。三つ力石があり、昔は催し物をしていた。 大山祇神社 トサカ谷のずっと奥の方、上山神、三浦姓の氏神という。

4、生業

田では米の後に麦を植えた。田んぼは赤牛、馬はほとんどいない。行宗の谷(大谷)も奥まで田だった。かなり水量があった。大豆を田の畦に植えてしょうゆをつくりよった。子供の頃、山は切畑でイモを植えていた。楮はすっと作っていた。蒸して皮をはいで製品化しており、現金収入になっていた。

(楠瀬慶太)

【註】

- 1) 2018年9月に地元の行宗正浩氏(昭和16年10月10日生)に話を伺った。
- ²⁾ 行宗文書の現地調査については、楠瀬慶太 2019「柳瀬名と行宗名の開発―史料と現地調査から探る村落景 観」中世地下文書研究会高知調査報告会、楠瀬慶太 2019「行宗文書の地名比定と室町・戦国期の開発」第 10 回中世地下文書研究会紙上報告で報告した。具体的な地名現地比定による行宗名の村落景観や開発過程の復 元については後稿を期したい。

福万一利水で開けた中世の名田一

旧山南村(後の東川村、現香南市香我美町)北部にある福万集落は、西北から流れ入る香宗川が湾曲して南西に向かう地点にある。川の高低差が発生する構造を生かして中世の早い時期から用水路を開削し、田地が開けていたと推測される。開発を主導したのは「行宗文書」に登場する名主・福万氏1)。福万氏は嘉元3年(1305)、近隣の行宗名主の未納年貢を肩代わりして2貫200文の金を調達しており²⁾、安定的な経済基盤を確立していたとみられる。本稿では、福万氏の開発と村落景観について古老への聞き取り調査と『長宗我部地検帳』(以下『地検帳』)から復元するとともに、福万地域の民俗誌についても書き記す³⁾。



カイゾイの堰から取水した用水路

1、『地検帳』に見る福万名の開発

天正 16 年 (1588) の『地検帳』に見る福万村の検地は、南側の大岩村境の「立石川縁永通本」から始まる。ほとんどの土地を福万氏(福万孫右衛門)が支配し、新たに検地された出分の土地が非常に少なく、すでに土地開発がかなり進んでいた状況が確認できる。『地検帳』記載地名を現地での聞き取りと検地順から比定し、空中写真上に落としたのが図1である。検地順に村の景観を見ていく。

まずは香宗川北側の日ノ地側。西側には「セトノ谷」「深淵ノ前」「コヤシキノ前」「宮ノ後」「宮ノ東」と計7筆10反7代の田地が記載される。



図1 『地検帳』記載の福万村の地名

中田2筆、下田6筆で「ヒノクチ」(樋ノ口)の地名からセトノ谷などの小谷(傍線)から引いた水路の存在が想定できる。「宮」とは福万の氏神・若一王子で、「若王子宮床」が記載される。「深淵ノ前」に畠を伴う山畠屋敷(「三郎兵衛ゐ」)、「コヤシキノ前ノ上」に屋敷(「刑部ゐ」)がある。

中央部は「宮ノ前」「南ノクホ」「スナタ」「クホ」「西ノ前」「中ヤノ前」「土ゐノ前」「エホシカタ」「桜カクホ」の計9筆13反13代7歩の田地があり、上田2筆、中田5筆、下田2筆である。田地の分散状況から、台地上に棚田が広がっていたと推定される。「スナタ」(砂田)は川沿いの田、「南ノクホ」「クホ」(久保)は中段、「宮ノ前」「土ゐノ前」などが高い場所の田であろう。特に「土ゐノ前」は村内で最も広い3反の上田である。土佐では開発領主(名主層)の館「土居」前に直営田として「土居ノ前」や「門田」が存在する場合が多く⁴)、福万村の「土ゐノ前」は初期に開発された福万氏の直営田であろう。「西分上」に屋敷(「久兵衛ゐ」)がある。

中央部~東側は「南ノ前」「堂坂」「北ノ前」「ヲトミノ前」の計4筆5反9歩で、上田3筆、

下田1筆である。「ヲトミヤシキ」に畠地30代、「ヲトミヤシキノ南」に山畠屋敷(泉蔵ゐ)がある。中央部の高い場所には屋敷地が広がる。「長福寺ヤシキ」(寺中)「東ヤシキ」「城」「福万土居ヤシキ」と4軒が並ぶ。

対岸の山部(影側)も福万村の 領域である。「ムカイノワタ」「マ トハ谷」「マトハ谷ノ上」「下ホリ タ上ホリタ」「クイミノ木石カ谷入 テ」「中ノ坪」「カコ谷」「シノヘカ 尾」「コトキ」「柳タ」「池ノ谷」「西 谷」の計 13 筆 17 反 3 代。 畠が「柳

タノ上」「カイソへ」に計3筆1反20代。「ムカイノワタノ東」「ムカイカケヤシキ」「カツラキ前ヤシキ」「西カツラキ」の4屋敷があった。小浸食谷沿いの谷田が多数あり、比較的開発が進んでいた状況が確認できる。

福万の中央部・東側は、上流の香宗川の「カイゾイの堰」から引いた水路の利水で開発された田と考えられる。水路に近く利水に優れた東側は上田が多



図2 福万の地名地図(「」は屋号、+は新出地名)



裏山には福万城跡がある。詰ノ段を歩く

い。水が田の開発や等級に大きな影響を与えていることがよく分かる。カイゾイの堰は、山川川(香宗川)と中西川が合流点のすぐ先にあり水量が多くなっている(水位が高くなっている)ため現在のような水をせき止める大きな堰が無くても取水が可能だったと考えられる。この立地や水量の豊富さが早い段階での土地開発を可能にし、名主・福万氏の経済基盤になったと考えたい。また、大忍庄里分では川の氾濫による水害に田畑が見舞われた様子が確認できるが5)、河岸段丘上に主要耕地のある福万村は水害のリスクが大きくなかったと考えられる。土佐山村の開発は、日の地側から影側へ広がったと推定されており6)、福万村でも同様で山地の多い影

側では材木や楮、炭などの山資源の利用も進んでいった と考えられる。

2、福万の民俗誌

(1) 地名

砂田 大水が出たら川の流れで水がかかる田んぼ。 西谷・影 対岸の小集落名。影には家が3~4軒あった。 影清水 小字は「蔭ガ清水」。石切場があった。



薬師堂側の中世石塔群

瀬・淵 「宮ノモト」が瀬、淵は「東ノコモ」、深淵。

屋号 「上土居」「新宅」「ソラ」「「話」「上」がある。

(2) 集落・宗教

集落 現在 10 戸で約 30 人。戦国末期の『地検帳』が 13 戸(居屋敷 6 戸)、江戸期の「寛保郷帳」が 10 戸 65 人であるから、集落の戸数自体は大きく変化していない。

鍛治屋 鍛冶をしている人が屋号「ソラ」にいて(ソラのおじさん)、農具を研いでいた。鞴もあり、いわゆる野鍜治。他に石切の仕事もしていて、向かいの山に石切場があって、石を馬で引いて出していた。加工はせず、どこかに売りに出していたようだ。

福万の吊り橋 ワイヤーロープの吊り橋で1メートルくらいの板をしいていた。牛も渡れた。 **店** 山南村内の中山川、下山川、末延にそれぞれ1軒あった。

神祭 昔は福万にもお宮(若一王子)があったそうで祭りの時には提灯とかが付いていたそうだが、山川にある石舟神社に合祀された。石舟神社の夏祭りや中西川に芝居を見にいったこともあった。

(3) 生業

田んぼ 米の後は麦、田んぼは福万全部で $4\sim5$ 町くらい。田で使う牛は赤牛だった。水に恵まれていて、水で苦労したことはない。山川川と中西川が合流する先に福万はあるので、川の水量は多い。堰の水で十分水は足りた。水路はその一つで谷から水は取っていない。あぜには大豆。コウゾも昔は植えていた。コウゾは大人が刈って加工して売っていた記憶がある。下山川部落にカジ(楮)の商売をしている人が 2人くらいいた。紙漉きは昔はいたというが、自分が小さいときにはやっている家はなかった。

畑 畑では桑、芋、ササゲも作りよった。家では蚕を飼っていて、小中学校の時はぎっちり手 伝いをしていた。

炭・薪 戦後の向かいの山や裏山はほとんどが浅木(カシやシイ)。15 年くらい置いておくと 上等の木になって炭にしたり、枝はタキモン(薪)にした。その後植林。タキモンはオイコ(背 負子)で2把・3把を背負って下ろしてくる。広場まで下ろしたら、仲買さんが買いに来てト ラックや荷車馬で取りに来ていた。炭焼きは農家の冬場・農閑期の副業で福万の各家がやって いた。黒炭。うちのおやじは「影清水」の向こうのウネを買って浅木を焼いていた。天秤棒で 前と後に俵をかけて、出していた。木の種類で等級が付いていた。ナラやカシが高かった。炭 も仲買がいて買いにきていた。

草場 個人の山で草を取る。共有山はなし。山の何メートルか岸を草刈場と決めて刈っていた。 **杣** 杣の仕事は冬場、親父も山へ小屋を作って住み込みで木を切りに行っていた。 親方がいて 雇われるというより、部落で組を作って仕事を受けてやっていた。

(4)交通・流通

交通 行き来する集落は東川村の中心地だった山川。今の道路が通常通る本道だったが、「琴木」 から下山川・中山川へ出る山道もあった。

荷車馬 夜須のおんちゃんが切った木を荷車馬にのせて南へ運んでいた。学校の帰りが昼頃だと、そのおんちゃんがちょうど木を積んで運んでいたので、乗せてもらって福万まで帰ってい

た。木は製材所がある赤岡や手結に運んでいっていた。材木の種類は主に杉やヒノキ、戦後は 材木景気で需要があった。

行商 魚屋は毎日来る。東川の奥のせんまい温泉の奥のおんちゃんが赤岡に仕入れにいって、「いらんかね」と自転車で売りに来ていた。

(5)戦争と南海地震

部隊駐屯 福万には戦時中(昭和20年の本土防衛部隊・護土か?)180~200人の兵隊が駐屯していた(中隊)。各家へ分散して兵隊は居住。中隊長は上の端の家にいた。馬も20頭くらい連れていた(後ろの山に小屋を建てて10頭くらい馬がいた)。「葛城」の奥にも厩を作っていた。向こうの山(影側)には上の端の方に壕がいつのまにか作られていた。一番高い所へいくと岸本の浜が見える。戦後遊んでいる時に見つけた。かごで土を運び出したんだろう。

勤労奉仕 兵隊さんが出征した家族の手伝い、麦を刈るなどしてした。東川の小学校でも勉強はせず、学校の農園で芋を作ったりした。

防空訓練 細川からこっちに来るトンネルが学校からの避難場所。防空ずきんを着て水のしたたるトンネルへ行く避難訓練をした。学校からの帰り道、芝やら草やらをかばんにくくりつけて帰っていた。B29 が上を飛びゆうのを見たら、道路をまともに通らず、水路の岸を歩いたりして逃げるように帰った。

終戦の日 8月15日、自宅でラジオを聞いた。10歳。ほっそい声で良く聞こえなかった。近 所のおじちゃん、おばちゃん、両親、皆真剣に聞いていたのを覚えている。

供出 米と麦が供出。収量調査があって1筆ごとの収量が分かっているから、決められた量を 供出。東川村で集めた。農家をしよっても麦飯や芋飯が中心で白飯はめったに食べれんかった。 戦後、外米も入ってきよったけど、農家はあまり食べていない。

南海地震 夜明け、障子を開けて外へ縁側から飛び降りたのを覚えちゅう。家が壊れそうなくらい揺れた。自分らあも(影側の裏山が)つえたらいかんと川の向かい(福万側)に2日くらい住んだ。明くる日、赤岡や岸本の浜辺の人がリアカーを引いて津波が来るいうて福万あたりまで逃げてきた人がいた。瓦は落ちたが、家がくずれたりはしていない。

(楠瀬慶太)

【註】

- 1) 嘉元3年(1305)5月20日の行宗名主重元田地売券(「行宗文書」)に「福万名主国延」がみえる。長宗我部氏の検地に先立つ天正14年(1586)の戸次川合戦で、福万七兵衛という人物が長宗我部信親とともに死亡している。長宗我部元親・盛親に仕えた戦国期の当主・福万孫右衛門は長宗我部氏改易後も牢人として同村にあったが、孫の代(半兵衛政冨)に千屋と改姓し、慶安3(1650)年に2代藩主山内忠義に歩行として召し抱えられ、高知城下へ移っている。以後、千屋氏歴代は留守居組か新小姓のいずれかの格式が認められたとされる(高知県立高知城歴史博物館HP「土佐史の人々ー中期ー」を参照)。
- ²⁾ 嘉元 3 年 5 月 21 日「行宗名主重元沽渡進永地事」、嘉元 3 年 5 月 21 日「行宗名主重元譲渡進重代相伝名 田」、嘉元 3 年 5 月 22 日「行宗名主重元沽渡進荒田永地事」(「行宗文書」)。
- 3)2019年9月7日に地元の沢村栄喜さんに聞き取り調査を行い、現地踏査を行った成果の報告である。
- 4) 楠瀬慶太 2018「土佐山村の屋号研究試論」『高知大國文』49 号
- 5) 徳治三年「百姓逃亡宛注文」(「行宗文書」)。
- 6) 前掲註4)。

柳瀬一元住民に聞く古き村の姿ー

上韮生川を挟んで、旧上韮生村と槇山村の境界に あった柳瀬村 (現香美市物部町柳瀬)。中世には柳瀬 氏が名主として治めた村で、戦国期に長宗我部氏と 関係を持ったことを示す古文書群「柳瀬文書」も残っ ている1)。現在中心の柳瀬集落は、永瀬ダムの建設で 戦後水没している。2007年に筆者が古老に聞き取り 調査を行ったが、その時は柳瀬集落の元住民には話 を聞けなかった2)。今回、元住民らがつくる「柳瀬会」 の協力を得て、現地踏査と聞き取り調査が実現した。

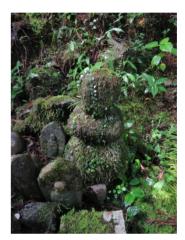


川の左側に柳瀬の土居が沈んでいる。

本稿では、ダムに沈む前の柳瀬集落の村の生活誌を、住民の聞き取 りから復元する³⁾。

1、地名

立石 たていし。別名ヘビジマ。10mくらいの高さの自然石の岩。 ダムが干上がったら何年に 1 回か出てくる。ダムに沈む前、昭和 の初めには小水力発電所があった。水路があって洞窟も抜けてい た。ダムができた後に蛇が集まるのでヘビシマと呼ばれるように なった。



柳瀬神社脇の石塔群

土居 柳瀬家本家。中世の土豪・柳瀬氏の本拠にあたり、江戸時代 は名本(庄屋)を務めた。それとは別に「出城(でじろ)」があった。本家(土居)を護る役割 だったと聞いている。家は「ウシロドイ」と「マエドイ」があった。

木戸岸 延慶 2 (1309) 年の槇山郷と韮生郷の堺相論文書「土佐国大忍庄槇ノ山与山田韮生山 堺至之事」(蠧簡集木屑31)に登場する地名。住民はキノギシと呼んでいた。

タテガ谷 お堂の東側、現柳瀬神社の川向かいの谷。日浦集落まで水路を引いていた。田役で 水路直しに総出で行った。なお水が足りない分は「杉ノ谷」の水を使った。1本の水路を利用 した田んぼが「日浦田」。タテガ谷は上池(神池)から出てきている。地図7の上の神社の箇所 には小さな祠があり、湧水がわいていて、その水を1~7の家が使っていた。

光石 ひかりいし。川から這い上がれんような大きな岩。川の中、日浦側にある。

一本橋 大きな大木を3本くっつけていた。大水で流れてもいいようにワイヤーでくっつけて いる橋だった。

ウオガエリ 魚でもよういかんような淵。

2、集落・宗教

集落 影、日浦上、日浦下、ムカイ組、土居、冬越で構成。大字柳瀬には、平井・立花で50戸、 柳瀬 50 戸(地図には 70 戸)で計 100 戸、柳瀬神社の祭りは合同で行った。

家の屋根 瓦葺きが多かった。藁葺きも少し。朴ノ木や山田から瓦を持ってきた。

西岡家の空間構成 隣の家との間に「刀研ぎ場」があった。先祖は刑吏?

| 母屋 | 隠居 | 庭 | 納屋

店 駄菓子屋で売っていたのは芋飴やキャラメル、センベエなど。駄菓子屋(岡本薫)では配 給の頃から少しだけ煙草も売った。豆腐屋は3軒あった。

買い物 99 パーセントは大栃で買い物をしていた。大栃は文具、洋服、魚屋、風呂屋、芝居小屋、警察、郵便局、小中学校などが揃う娯楽の中心であった。映画は 30 円だった。旅役者も(大人 $4\sim5$ 人の団体で)来ていた。

簡易水道 大正の終わりくらいから簡易水道が大栃にはあった。

柳瀬神社 春、夏、秋の祭り。秋は11月5日、神無月に神様が出雲行って帰ってきたのをお迎えする祭り。お宮へお迎えする。神輿はなし。9月は社日(しゃにち)、立花や平井集落からも人が来る。とうやがあって太夫さんが「いついつがお迎えじゃ」「お見送りじゃ」っていう。合同でお祭りにいく。(お参りに行く時は家から)1人ずつ当番が出る。神社の境内には相撲場があった。祭りの時の相撲には、遠いところでは豊永や徳島からも人が来た。物部の別府からも

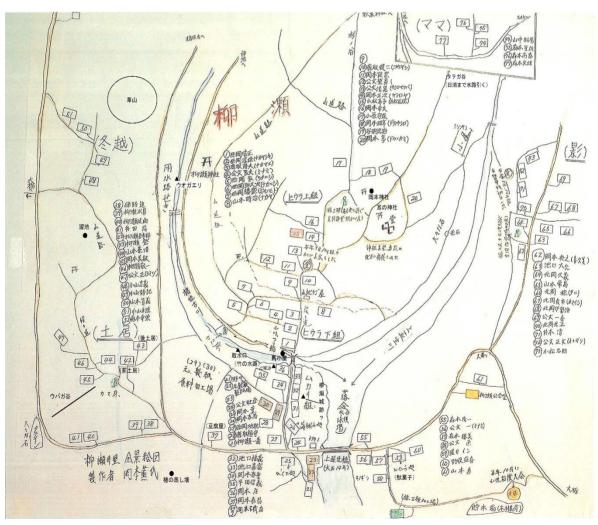


図 1 ダムに沈んだ柳瀬の地図 (岡本薫氏作成、一部筆者が加筆)

きた。回しをまいて、明るいうちは子ども相撲、夜になったら大人の 相撲。けんかになるほどで、柳瀬の人と外の人がやる形だった。

耳の神社 現在柳瀬神社の左にある「耳の神社」は昔は阿弥陀堂のすぐ上の社であった。

秋葉神社 火災予防の神様。秋のころ 11 月に太夫と氏子がぞろぞろと上っていく。餅をまいたりもした。御神輿や踊りはしていない。

岡本神社 岡本姓の神社。平井部落にあって8月15日に一族で集まって飲んだり食べたり。

金比羅様の祭り 年 2 回 (3 月、10 月)、柳瀬部落の中にある 2 箇所 の石灯籠(地図 10 と 72 付近に(金)と表記)で、夕方から晩にかけて



移築された柳瀬神社

集落の関係者が集まり、灯篭に火を灯して金毘羅様のお祭りをしていた。この石灯篭は高さ 2 mほどのものだったが、今はダム底に沈んでいる。

お**堂(阿弥陀堂)と浮浪者** 昭和初めの頃、浮浪者がお堂へ来て住み着いていて、たき火を消した上に敷物をして寝ていた。神社でなくお堂にいた。悪いことをするでもなし、農家に雇われて仕事したり、藁を売りにいったりする人もいた。そういう人が亡くなったら、生まれた所へ知らせて処置してもらった。

阿弥陀堂 とうやだけが参加して、8月ごろにお経(大般若経)600巻の虫干しをする。楮佐古の福泉寺の住職が来る。

太夫 いざなぎ流宗教者の太夫は柳瀬に3人いた。中でも岡本春之助さんはかなりの(力がある)太夫で、残りの2人とは地位が隔たっていた。家祈祷(やぎとう)といって正月に各家でお祈りをして1年中の平安を祈った。普段は「家がうまくいくように」とか色んなお祈りをしてもらった。病気祈祷もあった。「あそこの水を飲んだらよくない」とか。ほとんどの家が神式だが、楮佐古の福泉寺の檀家も数軒あった。

宗教者 「神主」は社をもつ。柳瀬では一人。岡本幸夫氏(日浦)の祖父が柳瀬神社を守っていた。太夫はいざなぎ流の宗教者。祈祷やお祓いに従事した。

天の神 お祭りしている家があった。「土居」(柳瀬本家) は祭っていなかった。祭っている家と祭っていない家がある。

屋根裏の祭祀 いざなぎ流の祭祀。「おいえさま」と称する。

犬神の話 太夫が家の「犬神」(いぬがみ) 憑依を診断。「あの家は犬神を祀る」といって畏怖の対象となった。現在でも祭祀を続ける家がある。

墓 各家が持つ山の上方にあった。土葬。「お山に行く」とは死ぬことを意味した。

楮佐古との関係 大日寺にお参りや遠足に行く以外に用はなかった。大日寺のお祭りには周辺 住民がこぞって参詣し、大人も子供も相撲をとった。

3、生業

草場 草刈山とか肥山とかいった。日浦田の上に共有の草場があったが、基本は個人の山で確保。夏の終わりから秋にかけて刈る。合歓の木に刈った草を引っかけておいて乾燥させたもの

を牛のえさにした。田植えの前に草を運んで小さく切って広げて、牛を入れて田をすいた。

牛馬 牛はずっと赤牛。馬を飼っていた家は1軒(1匹)。ムカイの鹿取福守さんが荷馬車でものを運ぶ仕事をしていたので持っていた。馬は自分で橋を渡って馬小屋に帰っていった。運んだのは材木や炭俵、米など。

田畑 米の後は麦、あぜには大豆を植え、豆腐や醤油、大豆を各家で作った。小豆は畑に植えた。カライモ、桑も木馬で出してくる。野菜(大根や白菜)は家の周り。

焼畑のサイクル 焼畑は山の上の方にあって小豆、ソバ、三椏などを植えた。材木の伐採後、 材木を搬出し、削ぎ落した枝木を残した伐採地を焼く。大根やソバを蒔く(ソバは 75 日で収 穫)。一緒にスギやミツマタを植え、成長の早いミツマタを伐採し、スギなど材木の成長を待つ 形式だった。

結い 苗を引き抜いたり、田植え、稲刈り、鍬の手入れ、桑畑の草刈り、楮の蒸し作業も結いでやった。誰それさんとこで何人分来てくれなど個人間でのやりとり。土地の持ち主のお返しでやってもらったら返すという感じ。

溜池 近くの田んぼに使うために1カ所あった。水を抜くことは滅多になかった。

炭焼 炭は焼いていたが、それぞれの家で焼いていた。原料となる木が十分なかったため、売買はしていない。

農事歴と賃牛慣行 5月に田をすき、6月に田植え。3月と7月には香長平野の農家へ牛を貸す。香長平野は二期作のためできた。4月25日は香長平野で早稲を植える日。牛市は美良布にあり、子牛の競売と牛の貸借の二つを行っていた。牛には牛靴(うしぐつ)をはかせ、美良布の牛市まで牛を送迎した。

楮 田畑のあぜや岸に植えていた。カジ (楮) の蒸し場が集落の組ごとにあって、1 人分ずつを蒸す。皮を剥いで干して水につけて加工。楮も三椏も1 軒の家だけでなく、仲間で一緒に仲買人に売る場合が多かった。個人持のカマドコで三椏を蒸す家もあった。大橋東側に農閑期の女性が三椏や楮の皮をのける作業場があった。加工後は高知の方からくる商売人へ出荷した。製紙会社の仲買人も買いに来ていた。

紙漉き 大橋の西側に紙漉きの工場がほんの数年間だけあった。野中さんという人がやっていた。水車を設置して製材も少しやっていた。ダムにつかる前は製材所だった。紙になる前に楮を細かく切る仕事をしている人もいた。

養蚕 蚕を飼ってまゆを取る。大栃に持っていき売った。

薪 たきぎを売る人もいた。大栃は山がないので、大栃の人に売りに行ったりした。個人が個人に売る形で業者はなし。

炭焼き 大倉山のあたりでやっていた。副業くらいの感じで2人くらいしかやっていなかった。 自家用。むしろ店で買うことが多かった。戦後は木(杉、ヒノキ)を植えるようになった。

わさび 上韮生川上流の久保や笹に取れる谷があった。

材木 杉、ヒノキは木馬でひっぱってくる。小学校の子どもの仕事、鑒(かん)を丸太の先に 打ち込んで縄でひっぱって出す。柳瀬では影側に貯木場があってそこに集めてトラックで大栃 などに出していた。橋の上も木馬や小さい荷車で引っ張って出した。材はやぐらにつんで乾か して乾かして軽くなってから出す。こうした山仕事は農閑期に行われた。

河川と材木 材木は川を一本流し。子ども時分には乗って遊んだ。柳瀬の川原で筏を組んだ。 祖父の頃には筏に乗って高知まで下ったという。

4、交通・流通・娯楽

道 上池に行く時は楮佐古を経由して。大日寺のお祭りの時は歩いてとことこ行った。結構人が集まった。出店が出るので小遣いをもらって行った。踊りはなくて相撲があった。子どもの時、笹の普賢堂のお祭りに行ったことがある。前の晩から知り合いの家に泊まって行った。

学校 柳瀬は上韮生村なのだが、学校は安丸小学校へ行かずに、槇山村の大栃小学校へいった。 **海の魚** 生ものは大栃へ買いに行ったが、めったに食べることはなかった。ジャコやウルメを 干したものを売っていた。

川の魚 イダを付いて焼いたり、煮たり。びんかんをつけて取るのが一般的だった。鮎を釣る人はほぼいない。かなり取るのが難しい。かごをつけてツガニを取った。ウナギはツケバリをウナギの通路において引っかける漁法。川漁は娯楽程度だった。

行商 だいたい赤岡や後免に住む被差別部落の人が来ていた。ジャコや塩サバ。芋と物々交換されていた。反物を売って県境近くまで行った人もいたそうだ。

娯楽 芝居やチンドン屋は (大栃にきて)、今晩あるから見に来てくれとか言われて木戸賃を払って見た。ラジオは戦前持っている家はほぼなし。1、2軒あったが電波悪く通じなかった。

相撲 子供の遊びは専ら相撲だった(西岡淳雄さんは中学生の頃相撲部に所属)。夏祭りでは「5 人抜き○○円」のような形で賞金が出ていた。あとは、川遊びや山遊びだが、川遊びで溺れた 人は一人もいなかったという。

雪遊び 雪は降るのは降るが、豪雪地帯のように積もることはなかった。10 センチほど積もったときには、雪の上を滑る「木馬」で山の斜面に積もった松葉の上を滑って遊んでいた。

ダム移転 ダム建設後 70 軒のうち、3 軒が南国市へ移住。ほかは大栃や美良布、野市などへ移った。

(岡本薫談) 反対の話もあったが(運動というほどではない)、いつのまにかやんで、香長平野の南部で田んぼを買った、家を買ったという話が出て(ちょっとでも良いところを買いたいと思って)みんなが一緒に反対にならなかった。保証金は 100 万円ちょっとくらいあった、30~40 万で家が買えた時代。お堂の後の家はダムには浸からなかったが壊して出て行った。荷物はトラックを雇って全部運んだ。ほとんどが新しい家だったので、売って壊して材を持っていった。出て行きたいという人は少なかったのではないかと思うが仕方なかった。ここにおれるもんならおりたいという気持ちだった。

戦争体験 (岡本薫談) 旧制中学校を出た後、高等小学校に2年いって就職先を探していた時、「志願兵行てみんか」と言われ、数えで17か18歳の時、南洋カロリン群島へ。ラバウルの近く。志願で行ったのが昭和18年8月、佐世保で3カ月訓練を受けて南方へ、アメリカの反抗があった。珊瑚礁の島で軍艦がつけられない。島にいたのは昭和19年の始めから。やっていたのは弾を運ぶ仕事。オーストラリアとイギリスの艦船が艦砲射撃をしてきた。内地から米を送っ

てきていたが、途中から来なくなって、サツマイモを作ったり、壕を掘ったり。空襲はグラマン、B24、B29の爆撃機も来た。終戦後、昭和21年1月1日アメリカのLSTという船に乗って横須賀に帰ってきた。

(西岡淳雄談)終戦時には小学3年生。終戦前後には、グラマンが学校の上を飛んでいた。これは航空写真を取っていたものだろう。敗戦の事実は小学校で耳にした。敗戦後大人たちは敗戦国の人間は殺されてしまうのではないかと心配していた。アメリカ人の進駐軍が柳瀬部落にも(ジープで)やって来て、(柳瀬公会堂のところで?)寝泊まりしていたようが、そこで全員が生活していたかどうかは不明。子どもたち相手にお菓子をくれたり、遊んでくれたりした。**南海地震** (西岡淳雄談)昭和21年、地震直後は高い田んぼに避難し、火を焚いて過ごした。家が壊れたり、怪我があったりということはなかった。個々人で逃げ込んでいた。山からガラガラと落石があった。

(楠瀬慶太)

【註】

- 1) 柳瀬文書については、2019年に筆者ら土佐地域史研究会(石畑匡基代表)が、県立歴史民俗資料館に未寄 託の近世・近現代の文書類を調査。中世文書の伝来に関する新知見を村上絢一氏が報告している(村上絢一 2019「「柳瀬家文書」原本調査結果を論じて近世の文書書写に及ぶ」第10回中世地下文書研究会報告)。
- ²⁾ 柳瀬集落の中世以来の来歴については、楠瀬慶太 2008「柳瀬―ダムに沈んだ村―」『新韮生槇山風土記』花書院を参照。村の景観や柳瀬氏の平野部進出については、楠瀬慶太 2018「土佐山村の屋号研究試論―物部地域の屋号に探る」『高知大國文』49号、楠瀬慶太 2019「柳瀬名と行宗名の開発―史料と現地調査から探る村落景観」中世地下文書研究会高知調査報告会、楠瀬慶太 2019「中世柳瀬氏の平野部進出に関する―考察」『会報 香美史談』43号を参照。
- 3) 聞き取りは2019年9月8日に実施。柳瀬出身の岡本薫さん(昭和2年生)、西岡淳雄さん(昭和10年生)、 西岡信正さん(昭和12年生)、西岡良さん(昭和15年)、岡宗信さんから話を伺った。共同調査を行った村 上絢一氏、鹿山雅貴氏、三升寛人氏の聞き取り記録を含めて筆者がまとめた。



吹越集落



平井(左)と立花(右)の集落

2019 年 9 月 7 日から 8 日にかけて 2 日間、高知県香南市と香美市に広がる大忍庄の荘園故地に赴き、古老から聞き取り調査を行った。本コラムでは私が 2 日間の調査を通して感じたことについて、徐に書いていきたい。尚、本調査は楠瀬慶太氏・村上絢一氏の両名のご高配で参加させていただくことができた。感謝申し上げます。

初日の調査では、香南市の香宗川沿いにある福万という小集落で古老から聞き取りを行った。 水利関係の聞き取りにより水利図を作成することが主な目的である。

調査方法は現在の地図を基に、地図だけでは分からない内容を住民から聞き取るスタイルである。この方法は楠瀬氏の師である服部英雄氏の荘園調査方法である。住宅地図を使って、現地に行かずとも地図を読み込むことでより深く村の歴史を聞き取ることができる。なぜなら住民は集落や田地、山の構造が頭の中に入っているため、こちらが地図を読むことができれば、地図を通して話し合うことができるからである。

特に古老の方から聞きだしたい情報は 70 年以上前の戦前の記憶まで戻るものもあるため、こちらが情報の外堀を埋めていかないと、古老しか知らないような内堀の情報を引き出すことが難しい。また、生まれてから 80 年近く同じ場所に住んでおられる方は自分が当然と思っていることが、我々から見れば重要であることが往々にして見受けられる。古老との「会話」にはこちら側が同じ土俵に立てるだけの情報の準備しておく必要を強く感じた。

2 日目は、香美市の山間地域に位置する柳瀬という集落において、古老のご案内で巡回とその後聞き取り調査を行った。初日の福万と柳瀬と大きな違いは、柳瀬はその主要部分が 1956 年に完成した永瀬ダムによって水没してしまったため、そもそも柳瀬名故地を歩くことができず、かつて住んでいた人々も 50 年以上前にその地より離れているため、福万のような現地調査をふまえた古老の聞き取りができないのである。旧柳瀬名の歴史はかつて住んでいた人々の記憶の中にしかなく、この方々から聞き取りを行い、地図や文字に残さないと、柳瀬の歴史の記憶

は永遠に失われてしまうことになる。私はこの柳瀬の調査を通して、失われていく歴史を後世に残していく意義を考えずにはいられなかった。

柳瀬の調査の関しては、幸いなことに楠瀬氏の 地域調査研究のみならず、水没する前の柳瀬の古 写真や古老が作成してくださった柳瀬の全景絵図 を提供して頂き、その地図に沿って聞き取りを行 った。そのため、こちらの聞き取りは楠瀬氏が事前 に準備していた質問チャートに沿いながら、ポイ ントを押さえて話を聞いた。聞き取りの内容は多



福万での調査の様子

岐に渡ったが、個人的に興味深かった内容をいく つか取り上げてみたい。

一つ目は、9・10月のお祭りの際に子供相撲と 大人相撲がされていたという話に関して、夜に行 なわれた大人相撲には徳島県より参加者が来訪 していたらしいという点だ。おそらく柳瀬のお祭 りのために、態々遠方から山間集落までお祭りに 訪れていたことは高知・徳島の村落を考える上で も興味深く感じた。

二つ目は、柳瀬の宗教施設に関して。古老作成



柳瀬の元住民への聞き取り調査

の地図によると、柳瀬神社を含め数社の神社は確認できるが、仏教施設は「堂」1つしか確認できない。そのためか葬式は全て神式で、太夫(タユウ)と呼ばれる者が葬儀を指揮していた。古老が柳瀬に住んでいた頃「タユウ」は3名いて、その中の1名が突出した存在であったという。この「タユウ」が水没する予定であった柳瀬神社を今の地へ移動する際に主導的な存在であった可能性が考えられたが、古老はその件は御存じではなかった。

最後は、柳瀬の地域共同体について。古老の地図によると、柳瀬には「ヒウラ上組」「ヒウラ 下組」「ムカイ組」「土居」「影」などの「組」が確認される。注目すべきは、出身の「組」から 分家して、別の「組」に住むことになっても、「組」は元々住んでいた「組」として扱われたと いう。柳瀬における出身「組」の紐帯の強さを感じた。

以上雑多になったが、2 日間に渡る荘園故地の巡回と古老の聞き取りを通して感じたことを記した。かつて大山喬平氏は、「1950 年代の農村には中世庄園社会の痕跡がどこにも残されており、そこでは中世庄民の末裔と会話をかわすことができた」と述べている(大山喬平編 1996 『中世荘園の世界』思文閣出版)。このような中世的世界の面影を残す村落社会を体験することは、令和に生きる我々には困難である。しかし、今回の経験から中世的村落の最後のよすがを感じることができたように思う。すでに戦後 75 年近く経過しており、1950 年代まで残っていたという中世的世界の面影の中を生きてきた古老は少しずつ数を減っている。このような世界について聞き取ることができるのは今が最後かもしれない。



かつて柳瀬の氏神があった地を歩く



現地で説明を受ける筆者ら

【コラム】〈消えゆく〉歴史の現場に考える―歴史の〈消滅〉をめぐる哲学的考察

三升 寛人

香美市柳瀬地域での調査は、非常に刺激的なものだったと今更ながら思う。それは、四国への人生初上陸だったという点においても、歴史学的調査の「現場」に初めて立ち会えたという意味においても。私は現在、大学院で分析哲学(という、主に言語のはたらきや論理の構造に着目しながら分析を進めていく哲学の一分野)を専攻する人間だが、歴史といえば、高校の授業で「日本史 B」を習って以来のご無沙汰であった。今回の旅の中で私が、折に触れて直面することとなった学問的手法の違い、すなわち同じ人文社会科学に属する学問領域でありながら、ただ部屋の中に閉じこもってひたすら文献や論理式と戯れている哲学の「インドア」さと、今回立ち会うことになった、自分の足で切り拓いてゆく歴史学(あるいは民俗学)の「アウトドア」さとの間にある対照には、考えさせられるところも多かった。

ここで、この「歴史が〈消えてしまう〉」という言い回しのもつ不思議さについて、単に言葉の綾をとるだけにならないように注意しながら考えてみよう。「消える」という言葉自体は、日常会話の語彙としてたびたび用いられるものである。たとえば、「さっきまで使っていたはずのボールペンがどこかに消えた」とか「ロの中に入れたアイスが消えてなくなった」といったように。そして、このような語法を了解していただけるのならば、「消える」という表現の日常的な用法から、次のような法則が導かれることだろう。すなわち、〇〇が消えると言われるとき、それが消えるまで当の〇〇は存在している、という法則である。それがそもそもないものであったならば、消えるという現象は現れてこないのであり、「消える」という語彙でそれを言い表すこともまったく意味不明なものとなるからである。

さて、先の○○の部分に「歴史」をあてはめてみるとどうだろう。先ほどの法則どおりいけば、「歴史が消える」という言い方が適切なものであるためには、そもそも歴史なるものは消えるまで存在していなければならない。「歴史」と呼ばれるものがそもそも存在していないならば、それが「消える」という言い回しはまったく意味不明なものとなるからである。しかし、ここで考えてみてほしい。歴史や過去が存在する、とは一体どういうことなのだろう。それらは物質的なものではないのみならず、その不在を本質とする類の対象なのである。どこかにやって

しまったボールペンや溶けてしまったアイスほどに、その(消えるまでの)存在を示して見せることはできないのである。ここで私たちは困惑する――歴史や過去が実在するということはそれほど自明なことでもないのかもしれない。だとすれば、(私たちの直観を支えていたはずの)歴史や過去といったものの実在性は、いかに説明付けられる事柄なのだろう――ここにひとつの(或る学問領域の大前提も揺るがしかねないほど重大な)哲学的問題が立ち現れる。

思うに、私たちがここで直面することになった困惑は、中世のアウグスティヌスの「それで は、時間とはなんであるか。だれもわたしに問わなければ、わたしは知っている。しかし、だ れか問うものに説明しようとすると、わたしは知らないのである」という告白(聖アウグステ ィヌス[1976]: 114) にも通ずるものだろう。今日でも「歴史哲学」や「時間論」と名のついた 分野では、時間にまつわる哲学的問題は活発に議論が交わされているところである。もっとも これは私の本来の専門ではないので、あくまでざっくりとした紹介に留めたいところだが、例 えば時間論の有名な問題として、ラッセルのいわゆる「五分前世界創造仮説」を挙げよう。ラ ッセル曰く、これは「まったく実在しない過去を〈覚えている〉人々をともなって世界が突如 五分前の状態になって現れたという仮説」(Russell[1921]: 159、拙訳)である。すなわち、今 ここにある世界は今からきっかり五分前、あたかも世界が五分より前から存在したように、奇 妙にもその時点までの〈記憶〉をもつ人々を含めて出来した、と仮定するのである。常識に照 らせば到底容認できないその仮定に、私たちはどうやって反論できるだろうか。五分よりも前 の世界の実在を、私たちは一体何に訴えればよいのだろうか。そして、ラッセルも言うように、 このような想定が「論理的に不可能ということはない」(ibid.) のであり、それはこの世界の実 際のあり様を言い表したものかもしれないのである。見かけは無邪気な思考実験であったもの が、ここで一気にグロテスクな様相を呈してくる(このラッセルの仮説の反駁については、野 矢[1996]の第2章や大森[1981]の第21章、青山[2019]の第3章を参照してほしい)。

さて、過去の実在性の問題に立ち戻ろう。野家啓一は、彼が「歴史の物語り論(ナラトロジー)」と呼ぶ説によって、過去が実在することは説明できるとする。彼の議論は、以下のようにまとめることができる。

一かつてあったものでありながら今すでにここにはなく、そのために想起されるしかない過去は、知覚できる現在とは対照的な「記憶を通じて思い出される事柄」である。ただし、過去の真実は一つしかないという直観から、唯一無二の客観的な過去自体がどこかに存在するはずだと想定するのは誤りである。そのような過去自体は人間の認識能力を超えて知覚されるはずのものであり、先の「想起されるしかない過去」という規定に反するためである。そんな過去自体の存在を否定しながらも過去の実在を肯定するために、過去は理論によって支えられる「理論的存在(theoretical entity)」として措定される。すなわち、直接に知覚できない素粒子の存在が物理学理論の理論体系や、たとえば京都大学のような特定の大学が社会的制度に関わる信念体系といった「物語り(narrative)」によって支えられている(構成される)ように、我々に想起可能な体験的過去は「過去物語り」によって(我々が実際に体験したわけではないために想起不可能な歴史的過去は「歴史物語り」によって)間主観的に、すなわちある種公共的なものとして構成されるのである(野家[2016]: 12, 136-154)。

ではこの、物語りによる過去の間主観的構成はどのようなプロセスを経て行われるのか。野家はこの構成を、空間的事物の知覚になぞらえて考える。すなわち、空間的事物の知覚は無数の射映(ある視点からの一面的な現れ)が意識によって志向的に統一されることで成立するものであるのに対し、過去の出来事は多様な「想起的射映」(記憶)が言語によって志向的に統一されることで成立するのである。たとえば、円形や楕円形、そして細長い長方形といった無数の見え姿が私たちの意識の中で統合されることで一枚の硬貨の知覚が成立するのに対し、複数人からの目撃証言、借用書という物証(およびその解釈)などによって、私の借金という過去の出来事が成立するのである。ここで成立した過去は「間主観的」な過去として構成されている。これは、私秘的な記憶が言語化され、証言の一致や物証などの条件をくぐり抜けて(志向的に統一され)間主観的記憶に転換されるプロセスである。と同時に、この間主観的記憶は、社会的に公認された過去となるための整合性を真理基準として含む社会的制度である点で、「過去物語り」と呼べるものなのである(ibid.: 158-169)。

このような「歴史の物語り論」に従えば、過去の実在性の問題に一旦の決着をつけることができる。そしてその実在性がひとまず担保されたならば、「消える」という述語を歴史に適用することにも多少肯けるように思われる。しかし当の問題は、着手されぬまま残されている。結局のところ、今ここになく過ぎ去ってしまった時間的部分としての歴史あるいは過去といったものは、「〈消えてしまう〉」のだろうか――実はこの問題については、この「歴史の物語り論」を論じる際に野家が用いていた、過去自体を否定する代わりに過去の実在を想起に訴えるというロジックの中に、大きなヒントが隠されている。

先の野家の「歴史の物語り論」においては、過去なるものは最終的に理論的存在、間主観的な記憶として構成されることが確認された。ただしそこでは、物語られた(記憶)内容がまさに過去のものであることはともかく、物語りを物語れる者(まさに「物語り手」と呼んでよいだろう)が存在していることや、彼らが語った内容を連綿と引き継いでいく仕組みが現在も存在していることが「物語りとしての過去」の隠された大前提であった。冒頭で取り上げた古老の「歴史が〈消えてしまう〉」ことへの強い危機感は、この数十年の内に訪れる物語り手の不在から、彼らの声は誰にも届かなくなり、その歴史の痕跡は読み取りづらいものとなり、その物語りを立ち上げにくくなっていくことへの強い危機感でもある。では物語り手の不在において、物語りとしての過去および歴史はどこに向かうのだろうか。このような物語りの源泉でもある想起作用に関連して、大森荘蔵は次のように述べている。

バークリィの余りにも有名な「存在とは知覚」を外挿して過去存在に適用するならば「過去存在(存在した)とは想起されることである」となるだろう。そしてこの場合、誰も知覚しないものの存在にバークリィが困惑して神を持ち出さざるをえなかったのに対応して、誰も想起しない過去実在が一層大きな困難を生じさせるだろう。しかし誰にも想起されない過去とはまさに無であるというべきではなかろうか。かくてバークリィの路線を踏襲する限りは、想起と無関係で想起と独立な過去実在は否定される公算が大きい。(大森

[1992]:129f.、傍点は引用者)

バークリの『人知原理論』の一節が示唆しているのは、(大森の言い方に従えば) 私たちの知覚経験を通じて捉えられる限りでの物体の存在は担保されているのであり、その知覚経験の外側にあるものは「神」のはたらきに訴えるしかない、ということであった。そしてそのような空間的部分の把握に対応させながら大森が述べるのは、「過去存在」という時間的部分についても、その把握は想起体験を通じて可能となるのであるということ、そしてその想起の外側にあるものはまさに、物語れない「無」である、ということである。

私はここに、歴史の〈消滅〉の問題に対するひとつの回答を見出している。物語り手が失わ れたときに歴史は消えるのか――私はその問いを見つめ直しながら、次のように答える。すな わち、その場合に歴史は、消えるとも消えないとも語りえないものとしての〈無〉となる、と。 客観的な過去自体なるものを否定し、過去や歴史とは物語りによって言語的に立ち上げられて いくもの(物語られたまさにそのもの)に他ならないとする限り、私たちはその外側に漏れて いく(過去や歴史と呼ばれ損ねる)ものを、いかなる時間的部分にも空間的部分にも属するこ とのない〈無〉とするほかはない。そしてまた、「無が消える」という言葉遣いが意味不明なほ どには、それは消えることもないように思える。このような結論は、「消える」という語の適用 をめぐる先の考察にも示唆されていた。「消える」という述語は本来、物質的な対象に適用され るべきものであって、時間的な概念にまで適用されるべきではなかったのだ。そのような概念 が示すところは、いわば消えることを語るための土俵のようなものであって、ボールペンやア イスといった物体が消えることは、そのような時間経過の土俵上でこそ有意味に語られる。と した場合、歴史や過去といった時間的概念は一体どんな土俵の上で〈消える〉のだろう。もし もそのような場が措定されるのならば、私たちはそれを時間の外側(果たしてそれはどのよう な場なのだろうか)に求めなければならないはずである。もしそのような場で真っ当に、歴史 や過去が〈消える〉としても、それについての物語りはきっと(バークリを持ち出すまでもな く) 時空を超越した「神」の手に委ねられている (これはまさに野家[2005]が示す、歴史の「側 面図」からの物語りである)。

しかし、今回のダムの底に沈んだ集落のことに限って言えば、当面のところ〈無〉に転落することを心配する必要はないだろうと私は考えている。彼らの 70 年以上前に在った日々をめぐる記憶(あるいはオーラルヒストリー)は今回、歴史学者たちの努力によってひとつの記録に転換されることとなった。その成果たるこの報告書は、今はダム底に沈んだ場所に、かつてひとつの集落が存在したという歴史を構成する足場たる「物語り」のためには十分すぎるものである――少なくとも私はそう確信している。そしてこの記録が、後世につなぎ止められていくならば、その歴史は実在しつづけるのである。物語り手のそのバトンは、この報告書に名を連ねた歴史学者たちの手に握り締められたまま、この報告書を繙いたあなたの手にもかかっているのだと言ってしまえば、それは(哲学を研究する者としての)私の越権行為となるだろうか。

末筆とはなるが、現地での案内のみならず今回このコラム執筆の場を紹介してくださった高知新聞社の楠瀬慶太さん、こんな門外漢の私を高知まで誘い出してくださった同じ研究科の先輩である村上絢一さん、その他今回の調査に関連して、貴重な機会を提供してくださったすべての方々にこの場を借りてお礼申し上げたい。おそらく彼らに出会うことがなければ、改めて歴史哲学の問題について考えてみようという積極的な動機は湧いてこなかっただろう。今回の調査で学べたことを私が、これからの研究成果に対してどれほどフィードバックしていけるかは、まったくもって未知数だが、今回の旅が自らの研究を自分の専門とは別の角度から見つめ直す、とても良い機会となったことだけは間違いない。このコラム執筆時点で未だ収束の見通しが立たない、この「コロナ禍」が落ち着いてきた頃には、ぜひまた高知の地に足を運びたいところでもある。

【参考文献・関連文献】

Russell, B. [1921], *The analysis of mind*, George Allen & Unwin. (竹尾治一郎(訳)、『心の分析』勁草書房、1993年)

青山拓央[2019]、『心にとって時間とは何か』講談社

大森荘蔵[1981],『流れとよどみ ―哲学断章―』産業図書

大森荘蔵[1992]、『時間と自我』青土社

聖アウグスティヌス[1976],『告白(下)』服部英次郎(訳)、岩波書店

野家啓-[2005]、『物語の哲学』岩波書店

野家啓-[2016]、『歴史を哲学する 七日間の集中講義』岩波書店

野矢茂樹[1996]、『哲学の謎』講談社

三升寬人[2020]、「大森荘蔵の過去論:想起過去説から歴史の物語り論へ」高橋塾発表資料



柳瀬集落元住民の古老が往時の様子を「物語る」

西後入一水の豊かなムラ

香美市土佐山田町西後入は、江戸期は佐岡郷六ケ村、明治〜昭和期は旧佐岡村の内で、後入村の3集落の一つ。旧長岡郡豊永郷角茂谷と接する山村である。森田分、中ノ谷、西ノ谷、東ノ谷の4集落に分かれた水量豊富なムラで、戦後には35軒の家があったが、過疎高齢化で戸数が大きく減少している。中ノ谷・西ノ谷は合わせて「御子谷」ともいい、戦国期には山田氏の重臣・傍士氏が治



写真1 山道を登った先に開ける東ノ谷集落

めた。ここでは、東ノ谷を中心に村の歴史的景観と生活誌について記したい1)。

1、『地検帳』に見る村落景観

天正 17 年(1589)の長宗我部氏による検地の台帳『長宗我部地検帳』山田郷地検帳(以下『地検帳』)では、「御子之谷」(西ノ谷)「西後入村」(東ノ谷)「柳ノ佐古」(中ノ谷)が現在の大字・西後入に該当する(図1)。西後入村と柳ノ佐古の一部は「西後入名」、御子之谷と柳ノ佐古の一部は傍士氏の領地となっている。該当箇所は虫喰いが多く、ホノギ(地名)は一部しか分からない。



図 1 西後入の集落

(1) 集落

まず『地検帳』の屋敷地から、西後入の集落分布を読み解い

ていく。東ノ谷には、「西ノ畠東」「マユハヤシキ」(マトバヤシキ)「中ヤシキ」「北ヤシキ」「□□屋敷」(土居屋敷?)「□キヤシキ」「□イウシロ」(土居ウシロ?)「□□□サコ」の8軒の屋敷が確認できる²)。中ノ谷には、「ミ子ヤシキ」「ヤナキカサコ」「ヤシキカ下」の3軒、西ノ谷には「カケヤシキ」(影屋敷)「名本ヤシキ」「名本ヤシキノ東」の3軒があった。東ノ谷には西後入村の名本(西後入名の名主か?)が「□□屋敷」(土居屋敷?)に居住し、西ノ谷の「名本

ヤシキ」には傍士三郎衛門が居住しており、中ノ谷を 分け合う形で、2勢力が支配していたことが分かる。

(2) 開発・水利

屋敷数から開発領主の館とされる「土居」の地名が 残る東ノ谷が、盆地状に開けた平地があり、早くから 開発されたと推測される。『地検帳』西後入村の「□□ 屋敷前ヤシキ付」の上田(1 反 6 代)が村内で最も広 く等級高い田であることから、最初期に開発された土 居屋敷付の直営田(門田)と考えたい。土居屋敷の前 に「北ヤシキ□溝懸テ」の記載があり、大谷川から水 を引いた水路「土居井」(溝)がすでに開削されていた 可能性を推測したい。現在棚田が広がる「カミタ」は



図 2 中近世の文書記載の東ノ谷の地名

「山畑」「定芝荒」が中心で、田は「下々」2筆しか確認できないことから、用水路でなく湧き水に頼った湧水田だったと考えたい。また、水量の多い「大谷」沿いの田も少なく、山畑が中心である。こちらも湧水田の間に山畑が点在する景観を想定したい。

中ノ谷には「トコロ谷」「ハサマ」「池タ」「ホリアケタ」「ツツミカトウ」「山中」「柳カサコ」、 西ノ谷には「山ノ神」「道の下」「東ノ所」「イヘノヲク」「名本ヤシキ」「サンテ」「ヤヤノウチ」 など田が分散している。水量豊富な御子ノ谷の水を引いて谷田が開発されている状況が確認で きる。名本ヤシキ付の田(23代)は上田で、面積は小さいがこれが名本の直営田であろう。

2、昭和期の村の姿

(1) 地名

上ノヤジ・下ノヤジ 江戸時代に西後入の庄屋も務めた森田家昔住んでいたとされる場所³⁾。 中ノ谷の集落北側。明治期の地券に宅地の記載はなく、森田家が住んでいたのは江戸時代か。 今は山林や野原だが昔は田んぼがあった。

藤ケ谷 フジの木がある。滝のようになっている。

屋号 東ノ谷には「西屋敷」(敷地内には昔の侍の石墓が多数ある。横山家の先祖八幡も祭られている)、「乾場」、「空笛」、「中屋」(『地検帳』には「中ヤシキ」と記載される)、「新宅」(ナカヤの分家)、「上ノハエ」、「東」の7軒があった。中ノ谷には「オモヤ」。「西ノ谷」には「カゲ」と呼ばれる屋号の家があった。

土居ヤシキ 屋号ではなく、田んぼの名前。

大谷川 竈神社の横を流れる川。川の一部が道に沿って水路になっていて集落あたりでは「土居 井」と呼ぶ。土居ヤシキまで続く水路、最後は「不動の滝」に落ちる。

仁井田川 御子ノ谷 (川) の下の方は仁井田川と呼んでいた。河口には現在製材所があって、 戦時中は松根油の絞り場があった。

(2) 集落・宗教

集落 集落名は東ノ谷、森田分、中ノ谷、西ノ谷の4カ所だが、森田分と東ノ谷の間のカーブの所(「トメ屋敷」)にも家が2軒あった(戦後、東ノ谷や大後入から移った人が住んだ)。戦後には中ノ谷に10軒、西ノ谷に8軒、東ノ谷・トメ屋敷・森田分に17軒の家があった。中ノ谷には太夫さん(神主)も住んでいた。

屋根葺き 家はほとんどが藁葺き。50 年ほど前に瓦葺きになった。集落で藁葺きをやってくれる人が歳を取って、瓦葺きにしようということになった。瓦は(山田の)楠目からがほとんどで安芸から仕入れた人もいた。瓦の葺き始めの頃は牛にリアカー引かせてそれに積んで運び上げた。藁葺きをやってくれていた人(「葺きさん」)は中ノ谷の人。藁は自分のところで蓄えて、お互いに出し合う。藁葺きの葺き替えは集落総出だった。「葺きさん」が指示をして皆でやる。子どもも手伝った。藁は田んぼに「くろ」といって家みたいのをつくって乾燥させたものを使っていた。東ノ谷には杉皮をはいで葺いた家もあった。

草場 藁屋根の材料には、カヤもまぜていた。カヤ場(草場)は大後入にあった。カヤ場を焼いているのは見たことがない(カヤ場は焼くと、大量に生育する)。おじいさんが「赤馬を飛ば

したらえい」というような事を話していたが、それが山を焼くということだろうか。

店 大後入には、倉橋さんのお店があって、お菓子やお酒を 売っていた。田が大後入にある人はその帰りがけに店で買い 物することも多かった。

御年神社・古宮様 西後入の祭礼について『昭和十七年以降 西後入部落信徒総代帳』(部落所蔵)は「旧正月八日御年神社、旧正月十五日阿弥陀不動様、旧二月十六日御年神社、旧三月四日古宮様、旧文月壱日御年神社、同九月二十一日御年神社、同十一月十一日古宮様」と記す。明治初期の『高知県神社明 細帳』は御年神社について東組の神、元三宝荒神、竈戸神社



図 3 東ノ谷の屋号と神社

内と記している。「古宮様」は大後入にある神社ではないかということ。大後入では御神輿がかつがれて日吉神社を出て古宮さまに行き、そこで拝んでまた氏神に戻るというコースをとっていた。

竈神社 東ノ谷の「竈神社」(西後入の氏神) について、『高知県神社明細帳』は江戸時代「八面明神」と呼ばれ、西ノ谷の八面明神(竈神社)を勧請した神社だと記している。地域では、西ノ谷と東ノ谷の竈神社の神様は姉妹だと伝承されている。『竈神社改築規約書』(大正 13 年、部落所蔵)には、大正期に氏子から資金を集めて改築を準備していることが記されている。お宮の隣には荒神さまが祭られている。

竈神社の祭り 祭りは年4回だったが、現在年3回となっている。2020年から2回(1月18日、9月2日)を神官さんにきてもらい、夏祭り(7月18日)は地元だけでやるようになっている。祭りは掃除をしてお祭りをする形式。昔はお祭りで相撲もしていた。御神輿があってにぎやかだった。おなばれで集落に神輿が来ていたという。おなばれで使ったと推測される太鼓も最近まで神社にあった。戦前には、毎週日曜日は氏神の掃除で子どもだけで連れ立って落ち葉拾いなどの掃除に行く。今は古くなったが、当時はきれいなお宮だった。当時鳥居は木製だったが、腐って今久保さん(森田分)のお父さんが寄付して石の鳥居が建った。

十三仏さま 東ノ谷集落に上がる手前の13の仏が線刻された岩。昔は集落皆がお祭りをし、 正月にはお参りにいっていた。集落の守り神という話もあるし、目の神様という話もある。

不動さんのお祭り 「不動の滝」の岩屋の下にお堂があった時、広場があって提灯を付けてに ぎやかにお祭りをやっていたと聞いた。お店(露店)も来ていたという。お祭りにはお坊さん はきていなかった。現在は阿弥陀さまの横に移動し、阿弥陀不動さまのお祭りとして 1 月 15 日 に祭りを行っていた。不動さんのお堂は古くなって今壊れていて修理することになっている。 直ったらお餅ばい (投げ) でもしようかと話している。

阿弥陀さま 東ノ谷にあるお堂。享保 15 年 (1730) の堂造立の棟札には「楠目村吉祥寺住龍岳」の墨書があり、江戸時代には吉祥寺の傘下にあったようである。江戸後期の『佐岡村役場文書』には「阿弥陀野林」の記述があり、林があったようである。現在も阿弥陀所有のヒノキが 2、3本あるという。現在お祭りは現在竈戸神社と一緒にやっている。

盆行事 戦前、東ノ谷の集落内の野原で子どもたちが集まって、むしろをしいておきゃくをする盆行事があった。行事の名前は聞いたことない。たいまつを薪にしてご飯を炊いて、おかずもつくってにぎやかだった。青年の人が主で仕切ってやって、子どもを集めていた。

(3) 生業

田んぼ ほとんどの家が牛(赤牛)で田んぼをすいていて、馬を飼っているのは1軒で競走馬だった。昭和初期には東ノ谷にも耕作用で馬が結構いたらしい。米は中稲。農林22号が長くて倒れやすいので、短い幸渡に変え、今はヒノヒカリ。西後入の米はおいしい。山のお米がおいしいと外から買いに来る人もいる。田植えはユイ(共同作業)で稲刈りや田植えをやって時期はあったが、田植え機など機械が導入されたら自前になった。手植えの頃は人を雇っても田植えしていた。田の水はいっつも水が冷たかったらよくない。日中は水の出入りをさせずに田んぼの水をあたためて、夕方に入れて、また昼がきたら止める。夜入れ、昼止める。これをやるようにと習った。田んぼの水を温めんと生育に段差ができる。稲刈りするとき、田んぼの奥は穂が実っているのに、水の入り口は青くて刈れないということがおきてしまう。水が冷たいと稲の成長がにぶる。圃場整備は西後入ではやっていない。

湧水と溜池 東ノ谷の公民館上の田はイズミ (湧水) がわくので、水を引かなくても田んぼができる。田んぼが割れたことはない (干ばつはない)。逆に冷たいわき水が入らないように田んぼの脇に板をして、土を入れて補強している。そこから上に三つの小さな溜池があり、水が足りない時はそれを使う。カミダの周辺には全部で五つ溜池がある。水は豊富で田んぼでは1反7俵くらい取れる。「大北」も湧水があって山を掘って溜池を造っていた。

麦から園芸へ 水田では米の後には麦を作った。冬の麦は少しずつやめていって園芸に変わった。昭和 25 年頃から始まり、30 年頃から本格的にやっていた。

畑作 田んぼのあぜには大豆、畑には甘藷などの芋類と小豆を植えた。うちで豆腐を作って、こんにゃくも木灰を使って作っていた。大後入には豆腐屋があった。畑は甘藷などのイモ類、野菜を造った。焼畑はやっていない。昭和 12・13 年頃まで田んぼの遊んでいる所にカジ、ミツマタを植えていた。切って佐岡本村の蒸し場に持って行っていた。

炭焼 東ノ谷には炭焼きをする人が多くいた。山を借りたり、自分の山でやったり。よそから来た人も上木だけ買って炭焼きをしていた。作っていたのは黒炭。下(佐岡本村)まで出すと佐岡小の近くに炭の検査場があってになって行った。あとは仲買人が持っていく仕組み。木炭はリアカーでぼこぼこな道を運んで下ろした(東ノ谷→本村)。リアカーは2人一組だが、1人で引っ張ることもあった。リアカーの下には「スラシ」(ブレーキ代わり)があった。カーブを曲がるのに一苦労した。

ワサビ 大後入の谷で少しだけワサビを作っている人がいた。

川魚 モツゴ、ハエ、ゴリ (おじいちゃんがブッタイ (漁具) でおさえる。「ゴリ押しに行く」という言い方をしていた。調理法は佃煮)、カニ (エサを入れた籠を付けて取る)、ウナギ (コロバシ (漁具) で取る) を川では取った。田んぼの中には昔はドジョウもいた。タニシは池のきれいな水でゴミを吐かして、ゆがいて豆と一緒に甘かろうに煮込む。こりこりしておいしい。 **蛍** 昔はようけおった。毎年6月1日に一番蛍が出る。特に8時ごろが一番飛んでいる。5月

20日ごろから飛び出す。門脇八幡のあたりが一番飛んでいる。蛍の名所。

集落の集まり 東ノ谷の公民館が拠点になっている。行事は年に2、3回。草刈りや溝さらえ、 氏神さまのお祭り、敬老会など、他にも「ちっとみんな集まろう」と行って集まる臨時のもあ る。持ち出しでおしゃべり。集まるのは女性が中心で男性は少ない。西後入と大後入の住民で 集まる時もある。公民館を建てたり、道路工事が終わったとか、そういうときはお祝いでお酒 持っていたり、持ってきてもらったり、2部落で交流する。

雨の伝承 奴田(有谷)の上に黒い雲が入り出したら雨が降る。奴田の山に線を引いたような「もや」がかかったら1時間したらなんぼ雨がふりよっても雨がやむという。

(4) 交通・流通・娯楽

材木 集落では山師を専業でやっている人もいた。杉やヒノキの山は中持さんがきて商売する (切り出して売る)。材木を運ぶのには地元の人が雇われて出ていた。

材木搬出 材木(丸太) は山から集落まではキンマで出し、本村の佐岡小学校あたりへと出す際は「ゴム輪」で牛に引っ張らせる。ゴム輪とは大八車にゴムタイヤがついたもの、牛は赤牛で水田に使うのを併用していた。三輪(のトラック?) を買ったのは昭和 35・36 年頃、三輪で材木を積んで出していた。

古道 集落間の連絡道は、50 掌幅の山道。東の谷から大後入へいく峠道は「モモガウネ(畝)」、 現在の道路と少し道が違うがほぼ同じ。東の谷から中の谷に行く道はカミダを越えて峠を越え ると中の谷の一番上の家の所に出る山道は「シノベガウネ(畝)」と呼んだ。シノベガ畝の道を さらに上に行き、「傍士の池」を通って山越えすると新改に出る。

水が出るムラ 大きく崩れた所(土砂崩れ)は最近ではないが、東ノ谷は大雨が降ると水が出るところ。山から出てくる水がカミダの谷川(カミダから流れてくる谷)に流れ込んで、すごく水が出る。雨がやまって天気になると、水はなくなる(→水は出るが水はけはよい)。大谷川も水が出たら田んぼの側の田は水に浸かってしまう。集落のハウスがあるあたりは谷水が集まる所。水が出ると音がゴーといって怖い。

裏山の崖崩れ 西屋敷の裏山が昭和 42 年 (1967) の台風で崩れて土砂崩れで家の納屋が潰れた (埋まった)。確か昼間の台風で大雨が降った。すぐ裏が崩れたのではなく、山の上の畑の方

が崩れて土砂が落ちてきた。町(土佐山田町)に お願いして、土砂をのけてもらって、後に砂防の メントをしてもらった。その工事もすぐだったと 思う。それ以来崩れたりはしていない。

風の強いムラ 東ノ谷は普段も他の集落より風が強いところ。大気が不安定になると、竈戸神社から「大北」のあたりから巻いて風が吹いてくる。北風・西風、北西の風が強い。巻いてきて前山に当たった後の跳ね返りの風もある。台風の時は瓦も飛んだ。雨戸もして戸も閉めて厳重に一昔前はやっていたけど、最近は台風もあまり来ない。前

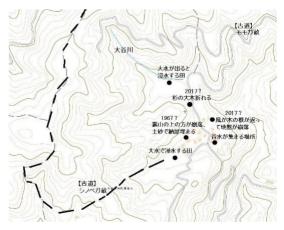


図 4 東ノ谷の災害関連地図

は米を収穫した後の9月にはイナグラが風で倒れよった。寒くなってからの北風もえらい。地 形がすり鉢状になっているからやろうか。大後入は風吹きやせんでも、こっちはすごい。

2017年8月の台風 風の被害と言えば、3年前の選挙の日、ちょうど台風で「オモヤ」の脇の木が風で根っごとひっくり返って大きなツエが起きた。2階のもとまで崩落していて、もう家も壊そうかと話していていたが、擁壁つくってなんとかなった。このときは車庫のシャッターも飛ばされて、ハウスも飛ばされた。台風の影響は朝から長かった。納骨堂の上にある杉の大木が倒れて大後入への道が通れなくなりチェンソーで切った。台風が沖を通る時は風もたいしたことないが、上陸してから戻し(北風)がえらい。

日当たり 西後入は朝日が早い、大後入は西日が長い。

魚の行商 大後入の人が魚の行商に来ていた。サバやアジ、おじゃこ(乾燥したやつ)、フカを売っていた。前浜(南国市)からも行商が来ていた、品物は変わらなかったがこっちが大後入の行商の魚より新鮮でおいしかった。オオク(天秤棒)をになって氷を詰めて魚を売りに。浜の兄さんと皆が呼んでいた。人が良くてマジメ、親切。信頼おける人物で、畑などに出ていて魚を買ったら、家へ上がって冷蔵庫に入れてもらっていた。魚と米の交換で、重いのに米をにのうて帰っていたこともあった。その後、南国市の天行寺の女の人が、干物やおじゃこを売りに来ていた。

芝居・映画 佐岡小学校東の方に芝居小屋があって、西畑人形芝居(春野町)の公演があったり、映画の上映もちょっとあった。山田駅前の映画館「東洋館」では「君の名は」「青い山脈」などの映画をみた。楠目の「永楽座」(芝居小屋)には、中村メイコが来たこともあったよ。

佐岡青年団 青年団には女性も結婚するまで参加した。何年かに1回演芸会を入場料もらって やって踊り歌った。香北町の人とも合同で勉強会をやった。内容は地域を元気にする方法など を話す会だった。青年団の運動会もあった。青年団の活動の拠点は佐岡小学校だった。

防空壕 戦時中には防空壕が作られており、現在は防空壕がイモ、生姜などの保管庫として活用されている。サトさん、カナメさん、ヨシオさんは使用していた記憶があるという。現在確認できている防空壕には、小野川家の防空壕とサエさんの防空壕がある。

(楠瀬慶太・大和敦子・石川惠大・大内田将爽)

【註】

- 1) 聞き取り調査は 2019 年 7 月 18 日、2020 年 7 月 6 日の 2 回実施し、横山佐代子さん(昭和 8 年生)、小野川和子さん(昭和 6 年生)、門脇章さん(昭和 19 年生)、門脇美恵さん(昭和 22 年生)、門脇サトさん(昭和 18 年生)にお話しを伺った。調査の対象は主に東ノ谷で、中ノ谷、西ノ谷については未調査である。
- 2) □は虫喰いで判読不明の文字。
- 3) 江戸期の西後入村については、『高知工科大学紀要』18号 (2021 年刊行) 掲載予定の論文「明治期における 香美市佐岡地域の土地利用と生業―「森田家文書」所収地券の分析―」(仮題) で『森田家文書』『佐岡村役 場文書』の古文書を読み解いて報告する予定のため、ここでは省略する。

談議所の民俗誌-香美市・山田堰周辺の暮らしの記憶

清水 謙次郎

はじめに

本報告は、旧大楠植村(現香美市)の山田堰周辺の談議所(だんぎしょ)地区で生まれ育った昭和14年生の小生が、記憶のある昭和21年から約20年間を思い出しながら、令和2年に現地を踏査した記録を「談議所の民俗誌」としてまとめたものである。調べて行くと思い出以上に色々の事柄が分かり、旧地図(昭和38年版)に記されているより少し前の談議所の表通りの商店もほとんど覚えていた。本報告では、談議所および山田堰周辺の昭和期の景観を復元する

とともに、地区の暮らしや産業、教育、交通などについて記憶と資料を元に詳述する。

1、大楠植村の景観と生活誌

まず大楠植村の由来から見ていこう。村は、大=大法 寺・楠=楠目・植=植村の3ヶ村の頭文字から取った 名前である。小生が少年期を過ごした旧大楠植村の談 議所地区(現香美市土佐山田町楠目)で、旧国道195号 線沿いの楠目から物部川に架かる香我美橋までの細長

い街並みである(図1)。談議所で暮らした約20年間(昭和14年から昭和34年)の生活環境を回想しながら報告していきたい。太平洋戦争終戦時からの大楠植村について談議所地区を中心に見てみよう。

【終戦末期の記憶】太平洋戦争終戦末期当時の日常生活は、政府の統制下で米をはじめ砂糖、醬油等の生活必需品、酒・タバコの嗜好品が配給された時代でもあった。米を買いに行く時は米穀通帳を持参し購入するなど日常生活物資統制(配給制



現在の談議所。令和2年10月。



図 2 談議所周辺地図

度)は国民生活の苦しい時代であった。統制時代の苦しい日常生活も近所隣同士お互い助け合い暮らしは明るかった。戦時中、物部川を挟んだ神母ノ木地区からのサイレンがいつも鳴り響いていた。サイレンは空襲警報発令の知らせである。戦闘機が物部川の上空を飛んでいたことが思い出される。

隣接する佐岡地区には陸軍の部隊が駐屯しており、空襲の被害に遭っている。佐岡小学校と 民家4戸が昭和20年7月22日攻撃を受け、死者4名重傷者6名が被害を受けた。他に校舎に いた兵士28人の死傷者を出した。兵士は岡山県の部隊で佐野小学校の西北坊山付近の田で火葬 にして遺骨は郷里岡山に送っている。兵士死傷者については当時知らされておらず、今回の調 査で初めて知った。近くの船谷山にも焼夷弾が落とされている。

【砂利道の国道】『村誌大楠植村』(昭和25年)によ れば本村の職業の構成は農家が約6割、商家2割、そ の他工業者・雑業者が1割位の比率になっている。戦 後は全国的に不況で、その後のエネルギー革命で発展 する企業、衰退して行く会社があって変革期となっ た。談議所は国道 195 線の旧道沿いの細長い町並み で、道路は舗装ではなく砂利道で馬車が木材など運搬 している姿がよく見られた。バスが通れば砂煙が舞 う、自宅前は各家庭シッ(水を撒く)を打ち砂ぼこり の防止は何時も強いられた。



昭和25年頃の談議所(『村誌大楠植村』)

【談議所の街並み】旧道沿いには商店が並び、道路裏の両側には農業、鍛冶屋が多かった。筆 者の記憶から道路沿いの商店等を掲げて見よう。まず香我美橋元から中村駄菓子屋・岡村(下 駄など扱う)・杉内青果・林乾物店・徳弘自転車(現在新国道の貴船神社前に移る)・野村農機 具修理・井上タンス・甲藤時計店・楠瀬外科・公文(屋号は「竹屋」・衣料店、神母ノ木にも店 を出していた)・島崎(屋号は「シンボリ屋」で藁橙炉、提灯等製作)・武内打刃物(裏が鍛冶 屋)・奥宮理髪店・東川鮮魚 (屋号かも知れない)・製材所・西山店・竹内商事・古川彫刻所・ 今井菓子店・小笠原畳店・田中興行(芸人を兼ねる)・入野鍛冶屋・国沢鍛冶屋(?)・門田米 穀店・浜田建具(?)・和田商店・前田自転車(現在新国道沿いへ移転)・楠目洋裁・伊藤梅春 店(裏が鍛冶屋)・一圓煙草店(他に塩、切手など)・岩崎洋服・恒石鮮魚・奥宮理髪店・土佐 金物合名会社・島崎呉服店・三谷染め物店・鍵山染め物店・鍵山鍛冶屋・奥宮洋服店、門脇石 材・鍵山歯科医院・山下タバコ店・久万製菓があった。道路奥に赤松・山崎・尾立・山路・武 内・西岡・尾田・浜田・鍵山・土佐金物合名の関連工場等があった。現在楠瀬外科・恒石鮮魚・ 三谷染物店(2軒)・鍵山染物店の5軒が継続している。町通りは殆ど昔の家が新築住宅となり、 過疎化はしていない。

【談議所の産業】談議所の商工業者は大半が 4 人以下の零細企業であった。そんな小規模企業 の中で「土佐金物合名会社」は明治39年日露戦争の好景気に乗じ打刃物を始めた企業である。 資本金 18 万円で製品は鎌、鍬、鉈、庖丁等を生産していた。同同社の最盛期には刃物の焼入れ に電気炉等を導入。近代的な工場を駆使し、台湾、満州、東南アジア等にも輸出していた。そ の後昭和31年まで続いたが廃業している(その後大山氏が土佐金物(株)として経営している)。 産業については後段で詳述したい。

【合併時の状況】昭和29年、山田町・片地 村・大楠植村・佐岡村・新改村・明治村1町 5 村の合併で土佐山田町が生まれた。合併時 の人口は山田町 8125 人、片地村 3620 人、大 楠植村 2749 人、佐岡村 1523 人、新改村 2436 人、明治村 1375 人で合計 1 万 9788 人である (表1)。戸数は4868戸であった。町民生活は

表 1 土佐山田町旧町村の人口数推移(数字単位は人)

	昭和29年	昭和61年	平成8年	平成18年
山田町	8125	12060	11504	11574
片地村	3620	3453	3143	2795
大楠植村	2749	2652	2553	2380
佐岡村	1523	923	844	722
新改村	2436	1526	1388	1218
明治村	1375	1525	1454	1318
岩村		890	796	791
繁藤		650	556	437

農業を中心に養蚕業、鍛冶屋(打刃物)、和傘等の関連従事者が多い町であった。

2、大楠植村の産業

ここでは町史類を参考に、和瓦業や打刃物、葉煙草、養蚕業など大楠植村の産業について、 土佐山田地域全体の動向から整理しておきたい。

【和瓦業】瓦焼の歴史は古く、藩政時代に楠目・植村に各2軒の瓦屋があった。楠目地区には長く依光瓦工場と楠目瓦工場の2社が製造していたが、楠目瓦工場は2015年に閉鎖している。依光瓦工場は明治35年の創業で、高知市長・松岡冨功禄の協力を得て高知水電の電気を動力に機械製瓦の大量生産を始め、瓦産業に大きな革命をもたらした。筆者も小学校の授業で粘土細工の工作時瓦の粘土をもらいに行った覚えがある。瓦業界も屋根瓦がセメントやスレート葺になり昔ながらの和瓦が次第に減少している。瓦はやはり和瓦が綺麗で気品もあるが、時代の流れで規模が小さくなりつつある。伝統文化として頑張ってもらいたいものだ。また以前、美良布(香美市香北町)の近辺でも瓦が生産されていた。明治12年頃には業者は10戸、生産量は15万8千枚にのぼった。最盛期には朴ノ木(香美市香北町)の7戸で30万枚生産したという記録が『山田堰 物部川水利史』の中に記述がある。

【葉煙草】土佐の葉煙草生産の歴史は古く、野中兼山は寛文2年(1662)の掟書で「木綿、菜種、煙草の類を散田に栽培せしむべきこと」と栽培を奨励している。土佐山田地域では明治時代、葉煙草の生産は佐岡村が最も多くの次に山田町そして片地村が続いていた。『山田堰史』には、藩政時代豊永郷川井村(大豊町)の平吉という者が四国霊場巡拝の途中、宇和島(愛媛県)で九州の遍路に煙草の種をもらい持ち帰り植えたのが初めてである、などの記述がある。美良布・日ノ御子(香北町)からは、松尾峠を通り豊永に抜ける道がある。松尾峠ルートはきついが米等運搬道として美良布周辺の住民が頻繁に利用していた。

談議所でも他所よりも少ないが煙草の耕作をしていた。専売公社が出来るまでは葉煙草その物を民間で取扱い販売していた、そして刻みも販売していた。昭和6、7年頃から不景気に加えて稲作も不作、生糸も下落百姓の生活は苦しんだ。そこで山田町長初め大楠植村、新改村、久礼田村長らが養蚕にかわる換金作物として煙草栽培運動をおこし、県、国に栽培許可を得た。さらに学術試作が良好で昭和9年県下で栽培が高まる。以来昭和16年には耕作人員1924人、17年2056人であったが、終戦後の昭和21年まで下向した。しかし、翌22年から急上昇し昭和27年には5290人と増産に成功している。

合併でできた土佐山田町は、県に葉煙草再乾燥工場誘致計画を提出し、浜田幸雄大蔵省専売局長官(後に衆議院議員、高知市浦戸出身)はじめ国会議員に働きかけた。時の総理大臣・吉田茂の内諾を得て、昭和29年に八王子宮南に再乾燥工場が完成。この専売公社煙草乾燥工場誘致に町費300万円を投入している。しかし、全国的な産業構造の変化の影響を煙草産業も受け、昭和31年県内煙草耕作者6907人をピークに、減少の一途を辿り昭和44年に工場は廃業する。跡地34300㎡は競争入札で協和農機が土地、建物一切を1億8200万円で落札している。現在の農業機械メーカー「ヤンマー農機製造(株)」が高知工場として操業、土佐山田町最大の従業員数を持つ工場である。日本専売公社が山田町八王子宮隣りに出来た当時、あまりに大きい建物

に驚いた記憶がある。

また、『土佐山田駅五十年の歩み』によると、日本専売公社乾燥工場誘致候補には山田のほか、御免(南国市)も立候補していた。当時の山田駅第14代駅長石川笹一が、山田誘致や工場敷地買収に関わったこと回顧した記述もある。山田駅から乾燥工場まで側線が敷かれていたことから、国鉄山田駅はタバコ乾燥工場誘致で約13年間潤ったのであろう。

【打刃物】戦国末期の『長宗我部地検帳』は、1590年(430年前)土佐鍛冶屋が399戸あったと記録している。土佐藩の元和改革(1621年)で農業、林業用打刃物の需要は拡大し、生産量、品質が格段に向上した。野中兼山による山田堰の建設工事が始まる寛永16年(1639)頃から急速に打刃物は発展している。特に、神母ノ木を含む談議所地域は立地条件が揃い大いに発展していた。物部川から舟入川へ入る中継地点にある神母ノ木は、山地からの物資等集積地であったため、農業や林業に必要な鋸、鎌、鉈、鍬等を作る鍛冶屋が集まる条件が整い、鍛冶業が盛んになった。高知県工業振興課によると、明治21年県内の230人の打刃物鍛冶屋があり、その内土佐山田は180人で全体の約8割を占めていたという。

香美市土佐山田町改田の高知県土佐刃物連合協同組合(略称刃物組合)に照会したところ昭和55年の統計記録があった。それによると、鍛冶屋は194軒で、内訳は鎌=58、農山林用=41、包丁=両刃31・片刃22、斧=12、鋸(ノコギリ)=14、他関連=5、問屋=21である。地域別の内訳は土佐山田町115、南国市23、高知市17、須崎市34、その他5である。

また、『土佐山田町史』には昭和50年時の記録が整理されている。それによると、業者数150 (鎌50、農山林用33、鋸19、包丁26)である。工場当たり平均月産量は約250万円で、年間生産量は土佐山田全域で45億円にのぼる。販路は主として九州、中国、近畿地方、工場当たりの標準設備投資機械はベルトハンマー、重油炉、グラインダー、切断機、コンプレッサー、円砥等。工場の平均従業員数は3名である。資材の仕入れ先は県内外問屋で、販売ルートは70%が地元問屋、20%が県外直接取引、10%が県外問屋であったという。

談議所に工場があった土佐金物合名会社は、戦前戦後と製品を海外輸出していた。呉服屋時代からぼつぼつ金物を扱っていた当社は、日露戦争後の好景気を背景に鍛造業界に本格参入した。当時国内外に手を広げ台湾、朝鮮、満州等に輸出をしていた。工場も近代化され繁栄していたが、後継者等の問題で昭和31年に廃業した。同社廃業後の昭和32年には穂岐山刃物が当時大型機械導入を進め業界では数少ない株式会社を組織した。現在に残る唯一企業である。当社の敷地内に土佐打刃物会館が建てられ当社が管理をしている。小規模事業者では現在楠目、片地地区に4軒ぐらいの鍛冶屋が残っていると聞いている。

【養蚕業】高知県の近代養蚕業は、明治7年長野県から蚕種及び桑苗が移入されたことから始まっている。最初県内町村に養蚕教師を招き飼育を試みたが、気候風土が合わず効果は出なかった。明治8年高知市小高坂の西内義顕が滋賀県から桑苗20種余りを移入、東国より新蚕種導入し、好結果を生んだ。県民も賛同し関心が高まり拡散していった。また、県内では安政6年(1859)生糸の輸出を開始している。以来大正7年までの記録が『繭糸の足跡 高知県組合製糸史』に一覧表で記録されている。

談議所の対岸の神母ノ木には、県下最大企業「藤村製糸(株)」に次ぐ鏡繭糸の工場があった。

一般的に製糸と呼ばれていた。鏡繭糸工場の前身旧片地製糸は、本社を大阪市に置く四国製糸 (株)の所有地であった土地を買収。鏡繭糸販売組合として昭和5年登録発足。当時四国製糸の社長は原唯次郎氏で、後に鏡繭糸の専務理事、組合長として昭和37年死亡するまで32年間務めた。また鏡繭糸設立当時の香美郡には西佐古に香南繭糸、香宗に高香繭糸の2組合製糸があったが、その後蚕糸業の不況により解散している。鏡繭糸は昭和28年1月苗の倉庫3棟を残し全焼した。同年高知県生糸農協として再出発したが、昭和48年高岡郡越知町の高知県高吾繭糸に合併し、昭和49年全て廃業した。この年土佐山田町以外でも殆どの製糸企業が廃業している。現在鏡繭糸工場は市営住宅となっている。

高知県の養蚕業は終戦後衰退の一路を辿ったが、1 戸当りの収繭量は昭和初期の 2 倍、終戦時の 5 倍に増加した。これは飼育方の省力化であり、限定された少人数により多量の蚕種を飼育する事が出来るようになったからである。これは従来の飼育方エビラより莚(むしろ)飼育、給桑方法が単葉給桑より、条桑育(じょうそういく)となった事が要因と言われている。逆に養蚕業衰退は、終戦海外軍人、一般人等が送還され多くの人々が食糧品不足となり自給自足を強いられたことによる。桑畑は芋や麦を植え畑に、山林も食糧増産で開墾された。さらに海外から化学繊維の導入等も加わり繭の値下がりと共に、繭に代わる換金作物として園芸野菜に転じ、塩化ビニールの出現でビニールハウスによる施設園芸を営む農家が増加したことが、養蚕業界(生糸)の衰退要因となった。カイコの飼育方に加え化学繊維の普及、オイルショック等が重なり廃業・閉鎖が相次いだ時期、談議所には県の養蚕業育成計画により県立養蚕試験場が建設されている。しかし、期待された試験場は平成8年に完全に閉鎖されている。現在草むらの中に寂しく建物が残っている。

3、大楠植村の祭りと娯楽

【神母神社の川祭り】神母ノ木の神母(いげ)神社の物部川祭りは盛大な祭りであった。夜店も多くたくさんの人出で祭りは大賑わいだった。特に相撲人気は凄く賞金目当てか、近郊から多くの選手が集まっていた。相撲取りをはじめ祭りを楽しむ多くの人が遠方から来ていた記憶がある。地元の選手には大きな声援が送られ、熱気がただよい、取り巻く観衆で土俵は黒山の人であった。相撲人気は大人が多く、他に女性の踊りや浪花節(浪曲)があった。子供達は見世物小屋のノゾキ(小屋の中に小人(こびと)ー小さい大人)・ロクロク首(首が長く首が延び縮みする妖怪)などを恐る恐るノゾキ込みスリルを味わい楽しんだ。夏の風物詩・神母ノ木の川祭りは最大のイベントであった。

【貴船神社の夏祭り】神母神社より規模は小さかったが、談議所の貴船神社の夏祭りも浪花節や田舎芝居等で毎年盛り上がっていた。田舎芝居(歌舞伎)は藩政以来伝統的なものであった。地元の尾立国一さんらの芝居は貴船神社の祭りでも公演され、地元民の楽しみの一つであった。特に国一さん夫婦と他数名による演技は親しまれていた。国一さんは鍛冶屋が本業、自宅に稽古場もあった記憶がある。芝居は三味線と浄瑠璃を語る人がいて、子どもたちは芝居の一部や浄瑠璃の語りの仕草を覚えてまねをして楽しんだりした。また、国一さんを呼ぶ時に年配者は「国いっちゃん」といつも親しく呼んでいた。他の地域から依頼があれば芝居に出かけていた

と思う。

【芝居小屋】神母ノ木には三益座、山田には永楽座など芝居小屋があり、三益座は映画館を兼ねた建物で、映画をよく観に行った。永楽座は知っているがあまり記憶はない。三益座の映画は山田町東映館と掛け持ちが多かった。

【八王子宮の祭り】山田の八王子宮の祭りも盛大だった。常設の土俵があり当時の相撲人気が うかがえる。山田は人口も多く、祭りはすごい人出だった。祭りは現在も規模や内容は異なる ものの継承されている。祭りには芝居絵と絵馬台が飾られ、大きな額縁に描いた絵も見られた。

【花見】談議所の雪ヶ峰公園(旧雪ヶ峰城址)で常会(地域の人々の集まり)があり、花見を していた。酒が回る頃、炭坑節がまず出て、婦人方が踊り、やがてハジケン(はし拳)等が始 まり子供達も一緒に楽しんだ。

【村民運動会】大楠植村の村民運動会は楠目小学校で開催されていた。ムカデ競争、俵担ぎ(米俵を担ぎ力と速さを競う)など。年代別リレーが最後の競技で、10歳以下、20代、30代、40代、50代、60代であるが、50・60代になると急激に走力は落ちる。人生50年の時代。大人も子供も楽しむ村民運動会であった。常会の花見や住民運動会は現在行われていない。

【遊び場】子供の遊び場は雪ヶ峰公園。チャンバラなどして、冬は木馬(きんま)を自分達で作り山道を滑る。田んぼでは野球や凧揚げをして地主に怒られたものである。ヤマモモ、エノキ等大きな木に登り、板や縄、カズラで自分の小屋を作り遊んだ事が思いだされる。また、夏は山田堰を中心に水遊びや魚釣りで遊んだ。

4、大楠植村の人物

【川本直水(ちょくすい)】楠目出身で明治 41 年生。大正 15 年京都で旅客自動車運送業川本商店を立上げ、以来京都を中心に自動車関係各会社の社長を務め、観光事業にも関わった。京都府バス協会長、京都乗用自動車協会副会長、京都商工会議所観光会議議長、日本バス協会副会長などを歴任した。この間京都タクシー、保津川遊船以外にも大阪浪速交通・東京観光バス(はとバス)等にも関与している。また昭和 22 年に発足した京都高知県人会で初代会長に就任。特に坂本龍馬を敬慕し、昭和 37 年京都円山公園に私費を投じ坂本龍馬・中岡慎太郎の銅像を建立した。著書に「世界の観光」「坂本龍馬」「明治百年と坂本龍馬」等がある。1990 年 81 歳で死去(その後企業は 2002 年に京都交通が会社更生法適用申請、以来 2019 年に消滅した様子)。昭和30 年前後、楠目・談議所・山田町など県下の人々が縁故で川本氏の関連会社に就職している。小生の先輩、後輩も何人か川本氏の縁故で就職している。民間企業で活躍した高知県人として最たる人物だと思う。

【和田年春】元軍人で明治38年伊野町生。婦人は談議所の出身。戦後婦人の郷里に住まいを構え、和田商店では主に農山林用の打刃物商を始めた。他にコークス等鍛冶屋で使う材料も扱う。軍人としては満洲出兵時負傷し帰還、再度満洲国東安省虎林第150部隊(歩兵第44連隊)の大隊副官など務め階級は陸軍大将。戦後小中学校PTA会長・日本PTA全国協議会理事等務めた。また、教育関係では高知県立城東中学校教諭(剣道、体育)。満州医科大学講師。水泳を子供達に18年間無償で教えた(水府流5段)。水泳場は山田堰表であった。小生も人工呼吸の訓

練等を習いながら監視員を2年努めた。地元から「和田のおんちゃん」と親しまれた。昭和44年他界している。

【野島一郎】談議所の実業家、文化人として地元民には馴染みある人物である。楠目小学校PTA会長、本村の広報委員会長等を勤めた。楠目小にピアノ、ラジオ、テント等寄贈した当時は戦後間もない時代で小学校では重宝された。また、本業の打刃物の工場は電気炉やトラック(木炭車)を導入し、地元では近代化された工場であった。工場裏には社宅もあり、数十人が暮らしていた。会社の後継問題では一人娘であったので婿養子をもらったが、数年で離婚した。引退していた一郎は最終的に会社の閉鎖を決める。工場は大山さんが土佐金物として跡を継いだが、現在は廃業している。テレビ放送が始まった昭和28・29年頃、隠居生活の一郎宅は隣近所では最初にテレビを買い、夕方には大人・子供が放送を見に集まっていた。

【八井田實】現県立山田高等学校の前身山田高等女学校創立に当たり、全用地並びに建築用材一切を寄付、そして野中兼山神社の復興や谷秦山史跡に多くの私財を投じ保存を図った。小学校、高校等の後援会長、町文化財審議会長、秦山会会長等も務めた人物。山田高校内には「八井田寛先生頌徳碑」が建立されている。

【楠目玄(馬太郎)】本村の村長、県会議員、国会議員等を務めた政治家である。ある時高知市で老人の乞食に自分の衣服を与え裸になり、高知市堀川を泳ぎ新田の板垣退助邸を訪れた。伯から「玄海を渡るから馬太郎を玄と改めよ」と言われ改名した。

【松尾富功禄】楠目出身。あまり知られていない人物だが山田用水、香我美橋の架設、JR土 讃線の山田通過など産業交通に功績があった。民法に土佐の小作権存続を規定し県下8500 町歩 の消滅を防止した。土佐山田町で第2の野中兼山と言われる由縁である。また香美郡会議委員、 県会議員議長の後に高知市長。高知市長在任中には旭地区の合併、柄杓田上水道の竣工、天神 橋落成、高知高校開校、四国銀行発足などに尽力している。

5、小中学校の移転と物部川香我美橋

小生の母校・楠目小学校には昭和21年の入学当時は運動場が2つあった。東隣の運動場横に戦争当時の芋畑のような跡地があった。また学校西隣には村役場があり、役場前には大きな忠霊塔もあった。学校、村役場の西に依光瓦工業、農協(?)、楠目瓦工業が並びその先で山田町百石に入る。百石から談議所間で、家のない場所は殆ど桑畑であった。

小中学校時代自宅前(談議所)を通る児童・生徒が多くいた。談議所を通り抜け学校に行く 生徒が子供ながら不思議でしょうがなかった。談議所を通り抜けて対岸の片地小中学校に通う のは小田島地域の生徒であった。小田島地域は物部川の中州の様な地形である。この通学がな んとも理解出来ない子供時代の思い出がある。現在で言う「飛地」である。

土佐山田町合併で楠目小学校は新道 195 号線下段に移転。片地小学校は鏡中学校跡地に移転。 土佐山田中学校は楠目(伏原)に昭和 39 (1964)年9月1日、片地の鏡中学校と統合して鏡野 中学校として開校移転した。その後、土佐山田中跡地は集合住宅地、楠目小跡地はオートヨ土 佐山田工場(裁縫)、片地小跡地は片地保育園、鏡中学校跡地に片地小学校が移転している。

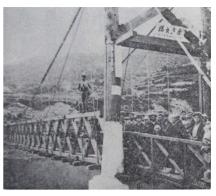
半世紀以上県外で暮らし現在は高知市に住んでいるが、旧山田町、談議所、神母ノ木の変貌

ぶりに驚く。新国道195号線が開通し、山田堰が取り壊され 新山田堰ができ、物部川香我美橋も洪水で橋桁が陥没し新 香我美橋となった。

6、土佐山田駅とバス運行史

JR土佐山田駅は香美市の表玄関であったが、現在の駅 前は少々淋しい。国鉄(JR の前身)となる前は省営バスと 呼ばれていた。国鉄バスの時代、山田から談議所、神母ノ木 へと至る旧道 195 号線のバス沿線は繁栄していた。山田駅 にはバスが常時何台も見られた。最盛期には香陽タクシー 会社裏に車庫があり数台が常時待機していた記憶がある。 昭和20年に撮影された土佐山田駅職員の写真に男子17人、 女 14 人が写っている。昭和 51 年、高知県が土佐山田町及 び同町商工会の協力を得て調べた数字では、国鉄山田駅利 用客は1日平均5千人とあり、1ヶ月の利用客は15万人と なる。汽車、バスを含む利用客の数字だが、現在では考えら れない数字である。

駅前周辺で話を聞くと、バスだけなら現在の利用者は 1 昭和 40 年代の香我美橋。昭和 47 年洪 日 150 人前後ではないかと話である。また、JR 四国バス営 業本部に問い合わせしたところ、記録がないがおおよそバがない。左手川沿い(白い線)は父養寺 ス利用客数は最盛期1日950人前後だったという。土佐山 井筋で香南市の烏川に合流する。 田駅にもバス利用客数の記録はない。駅前の香陽タクシー



明治44年竣工時の香我美橋。橋は吊橋 のようである。



水で橋桁が陥没した。現在の橋は橋桁

や駅前タクシードライバー、近くの年配者に聞いても、1日120人ぐらいという声が多い。ま た、高知工科大学の授業次第で若干上回る事があるそうだ。沿線地で祭り等何かイベントがな い限り乗客数は1日120人位が現状のようだ。

現在土讃線土佐山田駅から出発する JR バスの談議所、神母ノ木(高知工科大学経由)、美良 布方面の大栃線は基幹路線である。前身の国鉄バスは大正14年に開業し大栃線は昭和10年12 月から運転を始めている。以来龍河洞線、東佐岡線高知線、さらに土佐電バスも国鉄バス佐岡 線以外に若宮線、野市線、立田経由御免線、新改高知線を運行したが、国鉄バス・土佐電バス とも昭和44年頃から撤退が進み、現在の運行線は大栃線(高知工科大学経由美良布行き)のみ である。県交通と土佐電鉄が統合してできた「とさ電交通」は山田駅と龍河洞間のみの運行と なっている。

土佐山田駅前の香陽タクシーや浜田タクシーは頑張っている。山田町の旧道は談議所や神母 ノ木の様な寂れ方ではないが、それでも街を歩いてみれば静かな街並みである。談議所は商業 街の面影はなく完全に住宅だけの姿である。神母ノ木の旧道も寂れてしまっている。



昭和39年当時の山田駅 (『南国・香南・香美・土長の昭和』より)



現在の山田駅前。令和2年10月撮影

7、物部川と山田堰界隈の民俗誌

(1)物部川・山田堰が遊び場

物部川の取水堰「旧山田堰」に近い談議所に住んでいた頃の思い出話しをしてみよう。小生、子供の頃から物部川に親しみ、遊びの場としていた。県外に出たため 60 年以上物部川や山田堰とは縁遠くなったが終生忘れる事はない。子供の頃、先輩から半ば強制的に川に投げられ、水中に潜らされ水に慣れる事を教えられて年々水泳は上達したと思う。ここで言う強制的とは先輩から水に慣れる、水を怖がらない事を教える事である。おかげで水泳にはそこそこ自信があり海に潜っても大人と遜色なくなっていた。昭和 21 年、終戦後から山田堰を中心に約 20 年間(高校時代)毎年4月から10月頃の約半年間は物部川、山田堰が遊びの場であった。

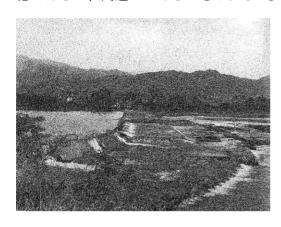
(2) 旧山田堰の来歴

ここでは山田堰の来歴について簡単に整理しておこう。山田堰を築いた土佐藩家老・野中兼山については語るまでもないが、寛永6年 (1629) から28年の歳月を費やし構築している。以来大正4年洪水で破壊され、大正10年にはコンクリートを使用した堰が完成している。再び昭和47年に堰は破壊され、その上流800m先に山田堰井筋土地改良区事務所ができて、事務所下に新山田堰が昭和48年に完成している。新山田堰の移転についてほとんど知らなかったし、旧山田堰周辺が物部川緑地公園となっていることも数年前まで知らなかった。従って小生の知る山田堰は大正10年に完成したコンクリート堰なのである。

旧山田堰から新山田堰が出来るまでを詳しく見てみよう。新山田堰は昭和 48 年 2 月に完成 し、分水工は昭和 44 年、隧道は昭和 49 年に完成し現在に至っている。なお分水工(上井筋、 中井筋、舟入川)は楠目小学校の下にある。新山田堰は山田堰、父養寺川筋を統合した堰であ る。右岸山田方面は隧道を通り分水工から上井筋、中井筋、舟入川分に分かれて流れである。 父養寺井筋は従来通りの水路を使用している。

新山田堰になる前の山田堰(即ち小生の記憶にある堰)を見てみると、上井筋(ウワユと呼んでいた)は山田堰の上流300mほどに取り入れ口があり、神母ノ木側まで別に堰があった。本来の山田堰から上井筋に取り入れる水量流が一定しない事から仮堰を作っていたという。つまり水量が多い時はよいが少なくなると流れが止まる。これでは下流地域には流れないから昭和

25 年前後問題解決のためと取り入れ口から 100m下流にポンプ場を設置した記憶がある。ポンプで下流に安定した流れができた。また、父養寺堰は神母ノ木側から 2~30m上流にある石積の堰であった。小生の記憶ではあまりにも小さい石積堰であった記憶がある。以上は小生の記憶であるが、間違いがあるかもしれない。

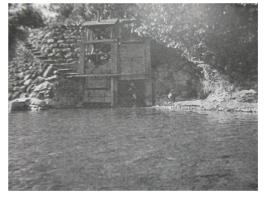




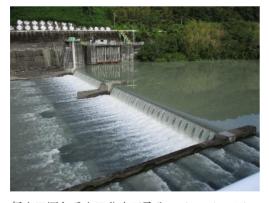
山田堰(昭和18年頃、以下4枚は『兼山先生遺蹟集』より)中井川。左手は舟入川(昭和18年頃)



舟入川 (昭和18年頃)



上井川(昭和18年頃)



新山田堰左手山田分水工取入口(2019年9月)



山田分水工。左から上井川・中井川・舟入川(2020年10月)

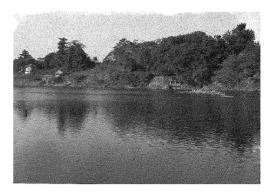
(3) 上井川堰の記憶

次に上井川堰について回顧してみる。堰は小生の記憶では昭和22年頃まであったと思う。堰の形や構造を思い出してみた。写真の如く神母ノ木側から談議所の上井川取り入れ口までの堰で、松の木を組み合わせた中に石をいれていた。水を止める隙間材料はシダ、カシの枝(小枝に多くの葉が付いた枝葉)、ゴザ、ムシロ(米など入れる俵の縫目を取り除いた物?)等使い水

漏れを少なく為に使用していた。堰は川が増水すると流されていた。堰に上がった事があるも 針金がむき出しで危険で止めた覚えがある。堰の形は写真の如く似たようなものであった。







上井川取り入れ口 『兼山先生遺蹟集』より

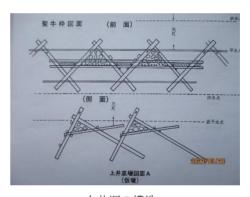
右側神母ノ木・下は山田堰 (『山田堰 物部川水利史』 付図より作成)

上井堰は下の図に似た三角形が印象に残る。堰は香我美橋下流 100mほど地点から上井川取り入れ口までであった。この写真は丁度神母ノ木側から上井川取り入れ口に向けて撮影されたと思われる。取り入れ口の写真「山田堰の歴史」が鮮明にわかる

(4) 上井川・中井川・舟入川の記憶

山田堰では毎年3月1日から10日間 "川干・田役" の行事があり、堰を開放するため上井川・中井川・舟入川の下流は水が止まり川は干上がった。関係者はその間川を一掃する。1年間の大掃除である。

上井川は山田堰本体の堰から取り込む水量が多い時は問題ないが、乾期には補助堰を必要としていた。昭和 24 年頃上井川の下流にポンプが備えられ川流に水を送っていた。上井川はほとんど覚えがないが、今も



上井堰の構造 (『山田堰 物部川水利史』より)

昔も変わらないのは三谷染物工場が洗い場として使っているくらいである。

川干と同じ日、中井川出口で大人たちの恒例行事「カエダシ」があった。出口の水が吐き出されると、水が引いた後に溜り水が残る。ゴザや南京袋等で堰を造り残り水は隣の場所に移し替える。残り水はバケツに縄を付け数人交代で水を干す(無くする)。魚を獲るのが目的で獲れた魚は酒の魚、多く獲れなくても後は酒を楽しむ「おきゃく」をしていた。

初夏の中井川と舟入川間の堤にはホタルが多く飛び交っていた。両側の川から飛び交うホタルは幻想的な光景を何度か見たことがある。ホタルが集団を作り大きなホタルの玉形ができる。 数百匹はいた。今思えば嘘のような話だが、ホタルの集団が入り混じる通称「ホタル合戦」を 思い出す。しかし、上流での永瀬ダム工事が始まり水は濁りホタルは大幅に減少していった。

舟入川の取入口は大きなトンネルで、山田堰最大の水量を送り出す役目を担っていた。香我 美橋に何度かイカダが止めてあったのを見たことがある。昔はイカダや船が舟入川を利用して 物資を高知方面に運搬していた。物資を運ぶ川には特別な職人が働いている。船、筏、人等に よって利用するそれぞれに通行料金が課せられていた。従って舟入川は最も大事な河川であり、 農業以外にも交通の要衝を遺憾なく発揮していた。







舟入川で出口

中井川風景

舟入川風景

(写真は全て『兼山先生遺蹟集』より)

(5) 山田堰周辺での魚獲り

この 60 年の間に物部川は、永瀬ダムや吉野ダムが建設され、大きく変化した。ダム建設前は 綺麗な水が流れる清流で、アユやカマキリ・アサガラ等々ほとんど見られなくなった。水は濁 り清流ではない物部川になった。また大雨増水で山田堰は壊れ、新しく山田堰が出来たことも 小生は驚いた。さらに旧堰跡が物部川緑地公園になり、上井川、中井川、舟入川は隧道を通り 山田分水工から下流に分かれている。昔を知る私は山田堰跡地を見て思い出も半減、昔の山田 堰が懐かしい思い出になる現在である。

【水越とアユの遡上】旧堰下流は約30m位を全面セメント(畳石と言っていた)で水越を挟み、神母ノ木側まで同じ造りである。このセメントが禿げたり壊れたりして中身の木枠(木材を組み合わせ)の中が水溜まりとなり、この場所にシラハエ、ウナギ、ナマズ、テナガエビ等がいてカナツキで捕ったりした。水越(約20m)の下流は山田島と神母ノ木側に分かれ、水の流れが少し緩む場所で瀬となり、遡上するアユなどの魚を狙いカナツキで突く(獲る)。滅多に獲れないが楽しい時間であった。なお山田堰には魚道が無く、魚はこの水越を通り遡上しなければならない。また、神母ノ木側の畳石はほとんど壊れたりしていなかった。壊れた部分が見当たらなかった理由は、川が増水しても神母ノ木側は小田島側より地形が高く水量が少なかったため破損しにくかったのであろう。

【アユ獲り】大人たちは解禁時、ほとんどがコズキと言う毛鉤(疑似餌)を使ってアユを釣る。 多くは戸板島の方に出掛けていた。アユが遡上すると次第に友釣りになる。気候が夏を迎える

時期になると友釣り(友掛け)が多くなるのは全国と同様である。友釣りにはオトリとなるアユが必要である。

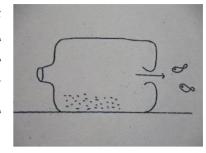
ノゾキでアユを引っ掛ける方法もあった。ノゾキとは木枠やブリキ (写真)の如くガラスをはめ込み水中メガネの代わりしたもので、川の中を観ながらアユを狙い引っ掛ける捕り方だ。ノゾキの特徴はアユを確認出来ること。反面水が濁れば出来ない。小生の父は毛鉤釣りと友釣りをしていた。父の幼なじみで近所の甲藤時計店の主人はもっぱらノゾキ専門で、こんな話を



ノゾキ (『四万十川の漁具』より転載)

よくしていた。「アユがおるか?おらんか?分からんのに気長 いのう一」。確かにノゾキはアユを確認できるが、友釣りは見 えない不確実性がある。しかしポイントを狙い当たれば面白い 等、お互い釣り談議をしていた。また、和田商店の和田のオン チャンも友釣りが好きで、「今日はどこ、どこで釣った」と見 せに来ていた。父の釣り仲間の表情が今も頭に浮かぶ。

【瓶ズケ】神母ノ木の散髪屋片岡さんは瓶ズケで川に潜り瓶を 設置し魚を獲っていた。この方法は水がきれいな時のみ出来る



瓶ズケ (高知県 HP より転載)

が、川底が見えない限り不可能である。当時の物部川の水が如何に綺麗だったかよく分かる。 瓶ズケはガラスが割れ破壊した際、ガラスが川に残り危険度が高いため現在使用禁止となって いる。

【ウナギ獲り】ウナギ獲りには主にモジを使った。竹の皮 で編んだ筒と板を4角に組合せたモジがあり、竹モジは長 さ約50~60 cm、板モジも約60 cm。餌はミミズが多かった。 多く獲れたら神母ノ木の宮地料理店で買ってもらったりし ていた。他の釣り方ではヒゴ。餌はミミズや小魚(ハエ等) を使い、川底の石積、壊れた堰の穴に差し込み釣る。また、 はえ縄で釣れたウナギは糸に巻き付いてほとんどが死んで いた。神母ノ木に穴釣りの上手な老人がいた。

【ナマズ獲り】はえ縄でナマズがよく釣れたが、身がもろ く皮が固いためあまり食卓には出ない魚だった。大きいナ マズはウナギを裁く要領で料理するが、皮が固いため頭辺 りに包丁を入れ、ペンチ等で皮をはぐ三枚おろしにする。 ウナギのモジ。上は木材形。下は竹網形。 ウナギ同様蒲焼にしてよく食した。ナマズの身はもろいの ウナギの入口ベロはセルロドで作る。 で直ぐボロボロ身が落ちる。味はウナギと遜色なかった。 (『四万十川の漁具』より転載)



【トバシ】山田堰のすぐ上か下で、毛鉤を5本間隔に付けたトバシで夕方釣りをした。夕方に なると川面に虫が飛び交う。魚は虫を食うのでトバシで釣るのだが、5本の毛鉤で最後の針が 一番よく釣れた。時々アユも釣れるが、アユはシラハエやイダなどより引きが強く凄い手ごた えがあった。アユが釣れた時は嬉しかった。

【ツガニ獲り】 9月から 10 月はツガニ(モズクガニ)が下る時期である。ツガニは茹でるか、 潰して蟹汁にする。茹でた場合大きくないと食べにくいが、結構美味い。また蟹汁のカニは、 石臼で突くかセメントの上等で突くもだが、これが結構厄介者だ。汁が飛び散ると臭みが付着 する。厄介であるが蟹汁もまた美味い。昭和28年前後「ツガニは食べられん!」などと噂話が 飛んだ年があった。理由はツガニに「肺ジストマ菌がおる」と言う事で、特に蟹汁は食べたら いかんと言われた。理由は煮る温度が低いので菌が死なないという事である。以後20年位食し た事がなかったが、高知に帰省した折に食べたが実に美味かった。この蟹は談議所近くの佐野 で貰ったものと聞いた。うまい物にはトゲがある?ではないがうまい。

【フナ釣り】奥宮のオンチャンは何処で釣って来るか分からないが、フナを沢山釣って来ていた。近所では名人と言っていたが何処かの溜池で釣ったのであろう。また冬場は空気銃で雀や渡り鳥のヒヨドリなども撃ち、凄い名人芸を見せていた。小生も空気銃をもらって雀など何度か撃ったが滅多に当たらなかったが、当たった時は手応えがあった。

(6)物部川での遊び

物部川は終生忘れることはない遊び場であった。特に山田堰を中心に泳ぎを覚え、魚を捕る事も泳ぎが出来ないことには始まらない。先輩の教えを身に付け、覚え結構達者な子供であったと思う。小学校2・3年時にはそこそこ泳げていた。香我美橋の橋桁まで泳げれば、かなり自信となる。橋桁は川の中に2ヵ所あり橋桁までは約20m×3の60mで、対岸は神母ノ木である。橋より上流半坂山下は深く危ない所である。子供達はほとんど泳がない。物部川が増水したら何時も水深が変わり、ある程度水が澄み切るまで川底が分からない場所だった。



山田堰で泳ぐ子供達

当時ほとんどの小学校にプールなどない。溜池はカッパ(高知県は猿猴と言う)が怖いし、 泥で気持ちも悪い。当地の子供達は山田堰があり、泳いだり、魚を釣ったり絶好の場所である。

他の地域でも子供達の遊び場は物部川が多く、山田堰下流では特に河原が多いのでプール代わりで遊んだことだろう。写真は『写真アルバム 南国・香美・香南市・土長』に収録された談議所の梶田安広が撮影した昭和 46 年の写真で、「山田堰プールで水泳上達!」として記載されている。昭和 40 年頃までほとんど小中学校にはプールが無く、山田堰までバスに乗って泳ぎに来る子供がいた。

山田堰から下流 30mはコンクリートであった。堰は角材コンクリートに挟まれ増水時は角材で調節していた。コンクリートには鉄柱がはめ込まれ角材を積み重ねてあった。鉄柱にゴリが登り多い時には 40~50 匹はいたが、大変すばしこく捕まえることは出来なかった。

堰の中央辺りが水越と言って唯一この一ヶ所だけに堰がない。したがって年中水流の調節不可能な部分である。この水越の役目は物部川の水流を小田島側と神母ノ木側に二分割する為の役目を果たす。水越を流れた水は二分割出来るように河原が二手に分かれているが、以前から川が増水するたび流れが変わる。水の増減で川底も変わり、河原も変わる「水越」である。川の二分割は昔から問題を起こしていた歴史がある。

水越を流れた水は小田島側が低いためどうしても流れは小田島側となり、小田島側の堤防が問題になる。堤防決壊防止のため堰の下流に沈床が4ヵ所ほどあった。沈床は針金(電線)で編んだ網の中に石を詰めたもの。堤防脇の川底に設置し沈床で流れを変える事により小田島側の水害防止の役目を果たし地域を守っていた。沈床のある所は急流危険な場所で子供達もほとんど泳ぐ者はいなかった。特に増水時は怖い流れになった。

おわりに

談議所の昔を思い出しながら本報告を書くことを決めた。最初書き上げた内容があまりにも気に入らず、またパソコン操作ミスも重なり再度やり直し、パソコン操作でも苦労をした。報告を振り返ると、何か暗い記事が多くなったように思う。土佐山田町を中心に羽振りが良かった和傘や打刃物、養蚕業、煙草工場等はこの地から消滅してしまった。辛うじて穂岐山刃物が跡を守っている程度である。また、観光名所だった龍河洞の入洞者も激減した。JR土讃線の土佐山田駅を起点した交通網は乗降者が減少し、バス路線の廃止にも驚いた。ほかに瓦業や染め物、農業も衰退した。一方で国道195号線が新道になり、交通安全と時間短縮は丸印になった。街並みと家屋が気になり旧道を歩いて調べてみると気が付いたことがある。昭和28年当時の商店が建ち並んだ家屋の面影はないが、住民の姓氏は昔のまま残っているようだった。

また、思い出深い旧山田堰がなくなり、新山田堰ができたこと、旧山田堰の面影が無くなり 公園化したこと、上井川、中井川、舟入川が下流の合同堰分水工から分かれることにも驚いた。 野中兼山もきっと驚き安堵しているだろう。

報告の内容は以上の如く単純なものとなったが、何か一つでも参考になる事柄があれば幸いです。調査にあたり、多くの方々にお世話になり、ご指導を賜ったこと深く御礼申し上げます。

【参考文献・資料】

片岡亀太郎 1989『繭糸の足跡 高知県組合製糸史』高知県生糸農業協同組合

高知県教育委員会 1998『四万十川民俗文化財調査報告書』

樹林舎編 2018 『写真アルバム 南国・香南・香美・土長の昭和』

土佐山田町史編纂委員会編 1979『土佐山田町史』土佐山田町教育委員会

土佐山田町商工観光課・国鉄土佐山田駅編 1975『土佐山田駅五十年の歩み』土佐山田町観光協会

中村淳子 2003 『「四万十川流域移動漁具展」の資料に関する小冊子』四万十川財団

浜田晃僖 1993『兼山先生遺蹟集 野中兼山先生遺蹟写真集』

宮地仁 1950『村誌大楠植村』大楠植村弘報委員会

山田堰記録調査委員会 1984『山田堰 物部川水利史』土佐山田町

『土佐山田町住宅地図 昭和 28 年版』善隣出版

『山田堰史』(出版年不明)